

平成27年 第8回
教育委員会定例会会議録

平成27年8月4日（火）
港区教育委員会

港区教育委員会会議録

第2428号

平成27年第8回定例会

日時 平成27年8月4日(火) 午前10時00分開会

場所 911・912会議室

「出席委員」

委 員 長	澤 孝一郎
委員長職務代理者	小 島 洋 祐
委 員	綱 川 智 久
委 員	永 山 幸 江
教 育 長	小 池 眞喜夫

「説明のため出席した事務局職員」

次 長	益 口 清 美
庶務課長	佐 藤 雅 志
教育政策担当課長	橋 本 誠
学務課長	新 井 樹 夫
学校施設担当課長	奥 津 英一郎
生涯学習推進課長	山 田 吉 和
図書・文化財課長	前 田 憲 一
指 導 室 長	渡 辺 裕 之

「書記」

庶務課庶務係長	小野口 敬 一
庶務課庶務係	鈴 木 玲 奈
庶務課庶務係	齊 藤 和 彦

「議題等」

日程第1 会議録の承認

- 1 第2423号 第11回臨時会(平成27年5月26日開催)
- 2 第2424号 第6回定例会(平成27年6月9日開催)

日程第2 審議事項

- 1 議案第61号 平成28年度区立中学校使用教科書の採択について
- 2 議案第62号 平成28年度区立小学校特別支援学級使用教科用図書の採択について
- 3 議案第63号 平成28年度区立中学校特別支援学級使用教科用図書の採択について
- 4 議案第64号 港区立幼稚園教育職員の人事について(非公開)

日程第3 教育長報告事項

1 平成28年度予算編成方針及び予算の見積りに係る依命通達について

「開 会」

○澤委員長 皆さん、おはようございます。ただいまから、平成27年第8回港区教育委員会定例会を開会いたします。
(午前10時00分)

本日は、傍聴者が多数いらっしゃいますが、会議に先立ちまして、皆様をお願い申し上げます。事前にお配りいたしました注意事項をお読みになり、会議においては発言などなさいませぬよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

教育委員の皆様申し上げます。報道機関の方から、写真撮影、録音の申し出があります。許可してよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 それでは、写真撮影、録音を許可いたします。

日程に入ります前に、東京都高校問題連絡協議会から、中学校教科書採択に係る要望書が当委員会に送付されました。委員の皆様にはお手元に配付しましたので、よろしくお願い申し上げます。

「会議録署名委員」

○澤委員長 それでは、日程に入ります。

本日の署名委員は、綱川委員をお願いいたします。

第1 会議録の承認

- 1 第2423号 第11回臨時会（平成27年5月26日開催）
- 2 第2424号 第6回定例会（平成27年6月9日開催）

○澤委員長 日程第1、会議録の承認に入ります。

平成27年5月26日開催の第2423号「第11回臨時会」の会議録、平成27年6月9日開催の第2424号「第6回定例会」の会議録につきましては、承認ということによろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 それでは、承認することに決定いたしました。

第2 審議事項

- 1 議案第61号 平成28年度区立中学校使用教科書の採択について

○澤委員長 日程第2、審議事項に入ります。

議案第61号「平成28年度区立中学校使用教科書の採択について」です。

港区の中学生が、来年度から区立中学校で使用する教科書の採択について審議を行います。

審議に先立ちまして、これまでの経緯を簡単に説明させていただきます。

7月8日に、教科書選定研究委員会から、平成28年度区立中学校使用教科書選定資料が提出さ

れました。この選定資料に基づきまして、各教科ごとに教科書選定研究委員から説明を受けております。

教育委員の皆様におかれましては、この教科書選定研究委員会の選定資料を参考に、個々に十分な調査及び研究をしてこられたと思います。

これらのことを踏まえ、本日の教育委員会では、国の検定を受けた教科書の中から、教科種目ごとに使用する教科書を採択していくことになります。

余談ですが、先日、NHKのラジオ放送で、京都大学の霊長類研究所の前所長の松沢先生がチンパンジーの研究についてお話をされておりました。松沢先生がおっしゃるには、ヒト科の4属とは人間とオランウータンとチンパンジーとゴリラで、いずれも尻尾がなく、遺伝子学的に言うと、人間もゴリラもオランウータンもチンパンジーも遺伝子の約98%が同じだということです。先生がチンパンジーやゴリラの研究をしているのは、人間に似通った動物を研究することにより、人間がどういうものかを知ることができるからだそうです。

チンパンジーも石を道具として使うそうですが、チンパンジーと人間の違いは、チンパンジーは親が子に対して教えることがないということです。要するに、親のやっていることをまねするよふにということです。人類がこのように発展してきたのは、やはり教育があったからだということが、先生の話でよくわかった気がしました。そういった意味では、生徒たちに使ってもらふ教科書は、人類のこれまでの遺産を凝縮した資料であり、非常に重要なものであると、改めて教科書採択の重要性を感じた次第です。

港区立教育センターにおいて教科書展示会を開催し、平成28年度中学校使用教科書について公開をいたしました。期間中は、区民や教育関係者、教科書に関心をお持ちの方々70名がご来場になられまして、9教科についていろいろなご意見もいただきました。教科書採択に関しての関心の高さを窺うことができます。

前置きが長くなりましたが、これから9教科について、港区の生徒にとって最良の教科書を採択してまいりたいと思います。よろしくご審議のほど、お願いいたします。

それでは、最初に「国語」の教科書についてご意見を伺います。

○小島委員 澤委員長のお話を聞いて、なるほど良いお話を聞かせていただいたと実感しました。確かに教育は、もともとはまねることから始まるのですが、チンパンジーの例から分かるようにまねることだけでは限界があるので、人類が長い年月をかけて培ってきた経験的、科学的な成果である教育が非常に大事だと。子どもたちが将来、人間的にもすばらしく成長していくためには、教育で一つ一つを事細かくバックアップしていくことが非常に大事だと感じました。

教科書採択にあたっては、今の中学校での学校教育において何が重要なのか、何が大切なのか、そういう視点で考えていかなければならないと思っています。前回の教科書採択でも大いに議論となりましたが、OECDの学習到達度調査の分析結果から、日本の子どもたちは、普通の足し算などについては、大変優秀な成績をとっていますが、文章題や文章で答えを出すという場合の読解力、言語能力が非常に弱いのではないかと感じました。それから、数学的な応用力、科学的応用力に課題がある。グ

ローバルな現代社会を生き抜くためにはこれらを克服することが重要であることが明らかになっています。

読解力については、文章で構成される連続テキストだけでは足りないと。数学的な応用力、科学的な応用力をつけるためには、単なる連続テキストだけでなく、表やグラフを読み解く非連続テキストの読解が非常に大事だということが認識されました。そして、連続テキストや非連続テキストを読解したところをまとめて発表し、他の人に伝える能力、お互いが理解し合う能力が総合的な言語能力になるのですが、これを高めていくことが非常に大事だということになったわけです。

したがって、単に国語だけでなく、全教科において、それぞれ読解力、数学的応用力、科学的応用力を高めていく努力がなされていかなければなりません。

教科書採択にあたっては、今言ったような観点を大事にしなくてはならないと私は考えています。

前置きが長くなりましたが、中学校の国語では、社会生活に必要な国語の能力の基礎を確実に育成することが大切であることから、学習指導要領のポイントである「言語活動の充実」「伝統的な言語文化」「読書活動の充実」はもとより、「コミュニケーション能力」「情報活用能力」を重視した各領域の教材をバランスよく配置した教科書がよいと感じました。

○教育長 小島委員から、国語の能力で必要なことについて、全般的なお話がありましたが、私は具体的な話に移らせていただきます。

選定資料にもあるように、国語で身につけるべき力は、読む力や書く力があるわけですが、各領域の教材はどの教科書もバランスよく配置されていると思います。

「話すこと・聞くこと」の単元に力を入れている印象を持ったのは光村図書です。それから、「書くこと」については、東京書籍が詩の創作については系統的に設定されており、「書くこと」の単元を比較的多く取り上げている印象を持ちました。また、詩歌の作品数が他の教科書に比べても東京書籍は充実しています。「読むこと」については、選定資料にもありますが、学校図書と三省堂は重視した編集になっていると思います。

○綱川委員 教育長から各社の特徴をお話いただきましたが、東京書籍は、単元末に「広がる言葉」という項目を設置するとともに、資料編に語彙を豊かにする工夫が掲載されていて、生徒へ指導する語彙の量を重視した構成になっています。資料によると、3学年合わせて1,570語もの語彙が掲載されており、たくさんの語彙に触れさせることができるところがよいと感じました。

同様に、言語事項の内容が充実しているという点では、三省堂には「漢字を身につけよう」「文法のまど」など、独立した項目が記載してあります。

教育出版は、巻末の「言葉の自習室」で、読書教材、古典、言語学習など発展的な内容を取り上げていることから、生徒の自主学習における活用にも有効であると感じました。

学校図書は、各読み物教材の後の「学びの窓」の項目において、発問に対して直接教科書に書き込める形式になっていること、光村図書は、領域ごとに学びの手順を統一し、「学習の見通しを持つ」「次へつなげよう」などの柱を立て、具体的な手立てを示していることが、若手教員が増えている港区では指導に役立つのではないかという印象を持ちました。

○**永山委員** 港区の中学校では、朝読書という時間を設けている学校がたくさんあります。「読書活動の充実」の観点からみると、どの教科書も大変力を入れている印象を受けました。教材とは別に紹介の欄があり、わかりやすく編集されていると思いました。資料によると、紹介する図書の数が多いという点では、東京書籍が305冊と一番多く充実しています。次いで、光村図書が281冊、三省堂が144冊、教育出版が120冊、学校図書が15冊と掲載されています。紹介する本が少な過ぎると困りますが、どの教科書も読んでみたいという意欲付けにつながると思いました。

○**綱川委員** どの教科書も、インタビューの仕方や原稿用紙に書いた文章を推敲して読みやすい文章にすること、時候の挨拶や手紙の書き方などを巻末に整理して紹介しています。これらのことは、中学生にとって、将来必要であると思われる事柄をわかりやすく取り上げていて大変よいと思います。

また、どの教科書も、中学生の多感な時期に、「少年の日の思い出」「走れメロス」など、必ず読んでおいてほしい文学作品と中学生の興味・関心を引きやすい作者・作品を選んで編集してあると思います。その中で、教育出版は、取り上げている説明文がこの教科書のための書きおろし作品がほとんどであるというところが非常に新鮮であると思いました。

○**永山委員** そういう意味では、東京書籍と三省堂、光村図書なども同様に、文学作品の取り上げ方もバランスがよく、言語活動にも力を入れて編集しているのが伝わってきます。

学校図書は、他の教科書にない森鷗外の「木精」、芥川龍之介の「少年」、1年古典の「宇治拾遺物語」が掲載されておりまして、私も読んでみてとても参考になり、改めて勉強しましたが、中学生には少し難しい作品のような感じがしました。

○**小島委員** 光村図書は、非常によい文学作品を掲載しており、また文学作品だけでなく説明的文章としての内容も大変充実しています。作品の記載方法として、非連続テキストとしての図表や写真が非常に豊富に使われております。生徒が内容へのイメージを持ちやすい工夫がなされています。そして、習得と活用を繰り返しながら、見通しを持って主体的に言語活動が進められるように編集されています。また、コミュニケーション能力の育成という点で、「話すこと・聞くこと」の言語活動として「プレゼンテーション」や「ディベート」などの事例をあげ、効果的に学習できるよう工夫されています。どの教科書も「プレゼンテーション」の方法は取り上げていますが、光村図書は、相手意識、つまり聞き手を意識し、自分の一方的な主張にならないように「話すこと」を重視しています。このことは、小学校の光村図書の編集方針から貫かれていますので、中学校卒業後の学習や社会人となってプレゼンテーションをする際にも大いに役立つと思います。

○**澤委員長** 私どもが昔、小中学校で国語の勉強をしたときは、よい作品を読むとか、俳句や和歌を鑑賞することがメインだったのですが、鑑賞だけではなくて、日常的に役に立つ視点からの国語も大事です。プレゼンテーションや非連続テキストを使った自己表現として自分の意見を述べる、あるいは非連続テキストを解釈するといった視点でいきますと、小島委員が言われたように、光村図書は、中学校2年生でプレゼンテーションと同時に池上彰さんのメディアリテラシーのエッセーを使い指導できる構成になっているのも非常に効果的だと思います。メディアリテラシーの学習と

の関連から、新聞の事実の報道や論説を比較するために、実際の2社の新聞記事を掲載し、より生徒の思考に沿った形でメディアリテラシーを高めるための教材を扱っているのも、光村図書の特徴的なところでは。

○**教育長** 小島委員から、光村図書は、作品の記載方法として、図表や写真が豊富に使われているというお話がありまして、図表や写真は作品の理解を助けることに有意義ですし、またイメージをつかむということに役に立つと思います。その点で、光村図書はその辺の工夫が随所に見られます。文章以外の図表や写真といった非連続テキストから情報を正確に取得して、意味を考え、解釈したり推論したりする言語活動を重視した構成になっていると感じました。

○**永山委員** 日本の伝統文化という視点でも、光村図書は、生徒の興味・関心を高める構成になっている印象を持ちました。各学年に「季節のしおり」として、季節の移り変わりの時期に合わせて、コラム形式で日本の四季にまつわる名文が紹介されています。中学生の時期だからこそ、季節感や季節を表わす韻文や日本語の表現のすばらしさについて、ぜひ感じ取ってほしいと思います。

また、光村図書は、小学校で使用している教科書においても、伝統文化を意識し、季節ごとに「季節の言葉」のコーナーを設けた構成になっています。この点からも、義務教育9年間を通して系統的に学習できるので、小中一貫教育を推進している港区の中学校にふさわしいと思います。

○**小島委員** これまで港区では、長年光村図書を使用してきました。国語と言えば光村図書という話がありますが、私もそのような感じを受けます。言語活動の充実は、これからの子どもたちの発達にとっても大事なことです。光村図書は言語活動の充実に向け、国語科で学習したことを各教科の言語活動や日常生活に生かしていくという姿勢が様々な観点から窺えます。光村図書を強く推薦したいと思います。

○**澤委員長** 前半部分では、各社の国語の教科書について、それぞれ特徴を述べていただきました。なかでも綱川委員からは、若手教員が非常に多くなっている現状から、指導しやすい点では光村図書がよいというご意見がありました。後半も光村図書を推す意見が多かったようです。いかがでしょうか。これまでの意見から、光村図書の教科書が港区の生徒に適しているということで意見が集約されたように思います。

それでは、「国語」につきましては、光村図書でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○**澤委員長** ありがとうございます。それでは、「国語」の教科書につきましては、光村図書に決定いたします。

引き続き、「書写」の教科書についてご意見を伺います。

○**永山委員** どの教科書も、3年間の内容を1冊にコンパクトにまとめていると思います。また、選定資料にあるように、毛筆で練習したことを硬筆による書写に生かすという学習指導要領の趣旨を生かした編集になっています。

教育出版は、見開き2ページに毛筆と硬筆の両方を学習できるように構成されていて、わかりやすいと思いました。ただし、基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視しているため、若干丁寧過

ざるかなという印象も受けました。

○小島委員 東京書籍は、ワイドな紙面を生かし、資料を豊富に掲載するほか、生徒の書き込み欄を充実させた構成となっていますが、他社に比べ教科書の幅が広いので、広げると他の道具を机の上にもどのように配置すればよいのか、工夫が必要になると思います。また、内容面では「生活に広げよう」というコーナーを設け、自分の目標や自分の好きな言葉を選択し、書式を決めて書く活動の例示があることなど、日常の学習の参考にできるとは思いますが、時間数も限られているのであれば、あえて書写で取り上げることが必要かどうか疑問を感じました。

光村図書は、3年間の目標や学習の流れが明確に示されていて、生徒のみならず教員が毛筆と硬筆を見通しを持って学習できるような構成になっています。また、メディアリテラシーを意識し、巻末にある「活用のヒント」において、情報を集めて整理する内容がわかりやすく掲載してありますが、やや国語的な要素が多い印象を受けました。

○教育長 書写は、学習する時間が「1・2年生では20単位時間、3年生では10単位時間で学習すること」と、学習指導要領に示されています。学習時間数が限られているため、効率的に学ぶことができる教科書がよいと思います。

小学校で取り組んでいるように国語や他の教科と関連付けた学習を進めるよりも、中学生には、書写に集中して学習することが大事だと思います。そのような意味からも、書写の教科書はできるだけシンプルな構成であることが採択する上で重要な視点と考えます。

○綱川委員 教育長がお話しされたように、私も書写の教科書はシンプルな構成がよいと思います。その視点から言いますと、三省堂は3年間で10単元として、学校図書は3年間で7単元として構成しており、無理なく指導できるような配慮がされています。

特に、学校図書は、3年間で指導する単元数が最も少なく、国語の指導計画に無理なく位置付けられている構成になっていると思います。私は、今まで使用している学校図書を継続して使用するのがよいと考えます。7つ目の単元である「書写を生かそう」は、3年生の10時間だけで取り扱おうとしており、実際的であると思います。また、毛筆の基本点画を掲載する際、小学校で学習したことを踏まえ、1ページに大変コンパクトにまとめてあり、使い勝手がよさそうです。

○永山委員 私も綱川委員の意見に賛成で、学校図書がよいのではないかと思います。表紙に光沢がなく大変落ちついていて、和の装いを感じる印象があります。個人的な意見としてはこの教科書がよいと思います。

○綱川委員 三省堂や教育出版については、基礎・基本を重視して、他の学習や日常生活などへの活用に力を入れて編集している印象があり、やはり、そこまで書写の時間で追求できるかという疑問を感じます。書写の学習では、特に毛筆を通して日本の伝統文化についての理解を深めることに重点を置くべきだと考えます。また、学校図書は、単元の扉の写真と文字のバランスもとても美しいですし、学校図書を推薦したいと思います。

○澤委員長 残念ながら書写はそんなに多くの時間を割けられないということ、シンプルな構成という点から、綱川委員、永山委員は学校図書がよいと。教育長は、特にどの教科書がよいとは言

われていませんでした。小島委員は、東京書籍、光村図書の課題に言及していただいております。教育長、シンプルな構成という視点では学校図書ということでもよろしいでしょうか。

○教育長 そうですね。特に異論はありません。

○澤委員長 それでは、学校図書の教科書が適しているという意見に集約されたかと思えます。「書写」につきましては、学校図書でもよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 ありがとうございます。「書写」の教科書につきましては、学校図書に決定いたします。それでは、社会科ですが、最初に「社会（地理）」の教科書についてご意見を伺います。

○教育長 学習指導要領には、地理的分野の目標の一つに、地域調査などの具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に選択、活用することがあげられています。また、地理的事象を多面的・多角的に考察し、適切に表現する能力や態度を育てることが示してあり、教科書を採択する上で重要な視点ではないかと考えています。

○綱川委員 地理の学習では、理解だけでなく地理的な見方や考え方を育むことが大事だと思います。地図からの読み取りや地図を作成することなどの学習活動を充実させることは、思考力・判断力・表現力などの基盤となる言語力を育成するための言語活動の充実を図っていくことにつながると思います。

○小島委員 今、綱川委員が言われる視点で考えてみますと、子どもたちが主体的に学ぶことができるような教科書であることが大切です。問題解決型の学習展開になっているか、まずは、学習の流れやねらいの設定などが、子どもたちにわかりやすくなっているかが重要だと思います。

○澤委員長 思考力・判断力・表現力といった能力を生徒たちに身に付けさせるということでは、問題解決型の学習展開は非常に重要な視点だと思います。この視点を踏まえてご意見をお願いします。

○永山委員 教育出版や帝国書院、日本文教出版がアフリカ州と北アメリカ州で歴史的分野と関連させ、世界の地理や歴史に関する内容の充実を図っています。東京書籍は、ヨーロッパ州、アフリカ州、北アメリカ州で歴史的分野との関連が認められます。どの教科書も改訂の趣旨を反映させ、世界や日本の地誌について充実を図っていることが窺えます。

○教育長 先ほど、地理的事象を多面的・多角的に考察することが重要だと発言しましたが、歴史と公民とを関連させながら学習することで、より多面的・多角的な理解につながると思います。どの教科書も写真やグラフ、地図は見やすく使いやすくなっていると思います。また、東京書籍は、まとめのページで、実際の生徒の作品のような見た目でもまとめている点で、生徒にイメージを持たせやすくなっています。帝国書院は、地図と同じサイズになっていて、使いやすさとしては特徴があると思います。

○澤委員長 地域的特色や地域の課題を捉えるという点に関してはいかがでしょうか。

○小島委員 帝国書院は、東京の中心部に集中するさまざまな機関と題して地図を示しています。港区に大使館や出版社のビルが多いことが読み取れる点で、港区の子どもたちにとって身近でとてもよいと思います。

東京書籍も232ページの図に書いてあるように、港区における外国大使館の分布と題して、特に大使館に特化して地図を示しています。また、日本文教出版は、再開発の例として虎の門ヒルズの写真を使っています。港区の中学生にとっては身近に感じられると思います。

○**綱川委員** 小島委員から例示をしていただきましたが、このような資料から子どもたちが何を学んでいくかが大事だと思います。いずれも首都・東京と各地の結びつきの中で取り扱われていますが、教育出版では、東京上空から見た街並みの様子を航空写真で紹介しています。カラー写真はともわかりやすいのですが、写真が少し小さいような気がします。

○**小島委員** 地理の学習は、土地の高低や位置、地形等、地図との並行学習が必要不可欠です。その意味で、全ての教科書が、導入で地球儀や地図を取り扱っています。その中でも東京書籍は、導入の地球儀が見やすく、毎時間の授業で取り扱う見開きのページの左上に地球儀でその学習で扱う場所の位置が常に示されています。生徒は、この工夫により学習する場所が地球上のどこの位置なのかを把握することができます。この積み重ねは、生徒の地理的な概念を育成するために大変有効だと思います。

○**永山委員** 授業の最初に、どの大陸のどのあたりなのかということをつかんで、詳しく学習することを積み重ねると、土地の名前を聞くだけでイメージが湧くようになるのではないのでしょうか。そのようなイメージが持てると、地理がもっと楽しく学べるようになると思います。

○**澤委員長** 先ほど申しました思考力・判断力・表現力を支える言語活動の充実という観点からはいかがでしょうか。

○**教育長** どの教科書も、日本のそれぞれの地域について、地域の特色ある事象を他の事象と有機的に関連付けて、国土の認識を広げたり深めたりしながら、言語活動を充実させる編集になっていると思います。また、各社とも、レポート作成の方法が詳しくまとめられています。特に、帝国書院は、内容を単に覚えるだけでなく考える作業ができる点で、思考力・判断力・表現力が養えるのではないかと思います。

しかし、日本文教出版については、若干文字が多い印象を受けます。

○**綱川委員** 学習の振り返りのための言語活動の取り上げ方を比較すると、構成については、帝国書院や教育出版は、小テストをもとにそれぞれの地域の特色を表にまとめたり、意見を出し合う活動を多く取り上げたりしています。日本文教出版は、興味・関心を高める読み物資料の読み取りから、図表の中にキーワードを入れていく活動を取り扱っています。東京書籍は、小テストや学んだことをまとめた図、興味・関心を高める読み物資料という流れで配列されており、学んだことを確認してから、問題解決的に発展的な内容へ生徒の思考を広げていくことができるようになっていきます。また、読み物資料が生徒にとって身近な話題や人物を多く取り扱う工夫もされています。

○**小島委員** 学んだことを基にして、読み物資料を通して発展的な学習をしていく構成になっている東京書籍は、特に問題解決的な学習として評価できると思います。また、言語活動の視点ではないのですが、領土の取り上げ方も、東京書籍は、北方領土や竹島、尖閣諸島、領土の範囲に関して、量的にバランスよく記述されていると思います。

○澤委員長 それぞれの委員から、各教科書について意見をいただきました。

いかがでしょうか。港区にある大使館の分布図があることや教科書の左上の地図がわかりやすいなどの意見から、東京書籍の教科書が適しているということで意見が集約されたように思います。

「社会（地理）」につきましては、東京書籍でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○澤委員長 ありがとうございます。「社会（地理）」の教科書につきましては、東京書籍に決定いたします。

引き続き、「社会（地図）」の教科書についてご意見を伺います。

○綱川委員 地図は、単なる地理的な理解を深めるためのツールではなく、社会的事象について位置や距離関係を捉え、地理的な見方や考え方を育む重要な役割を担っています。したがって、生徒にとって、地図の見やすさ、統計資料の活用のしやすさがポイントだと思います。

その点では、東京書籍は、落ちついた淡い色調でまとめられ、視覚的に目に優しく光にも反射しにくい材質を使っています。また、特徴の一つとして、37ページのヨーロッパの鳥瞰図では、陸地だけではなく海底の高低差がわかる工夫もされています。

○小島委員 地図の命はまず色合いと見やすさですね。見やすさは何といても配色に左右されます。帝国書院は、全体的に鮮やかな緑を基調として、明るい黄色や茶色を使って、東京書籍と比べて非常に明るく、見ていても楽しい地図になっています。まず表紙ですが、帝国書院の表紙は、日本を象徴する富士山です。雪をいただいた富士山の上空にはどこまでも青い天空がつながって、そして私たちが住んでいる地球が左側にぽっかりと幻想的に浮かんでいて、大変美しいイラストとなっています。これが何よりも地図にとって大事なことです。子どもたちは、この教科書を見てわくわくし、地図を勉強したいと思うのではないのでしょうか。

世界の地形と題する地図が帝国書院の9ページにあります。これが（実際に示しながら）帝国書院の世界の地形という地図です。緑、黄色、茶色が全体に明るくて鮮やかです。東京書籍にも7ページに同じ題名の世界の地形という地図がありますが、全体的に薄暗い感じを受けます。オーストラリアを見ると、帝国書院は、緑も黄色も鮮やかで生き生きとして、港区の中学生が、海外派遣でオーストラリアに行ってみたいと思える地図だと思います。東京書籍は、配色について長年非常に努力して、帝国書院に追いつき追い越せということでやってきた努力は理解できますが、まだまだ帝国書院の域には達していないように思います。

地図は色合いと見やすさが命ですので、これで決まりではないでしょうか。

○澤委員長 地図は見た目の印象が重要ですが、見た目の印象は個人によっても大分差があるようです。統計資料につきましては、各社ともカラーでまとめられ各種統計が見やすくなっています。私が両教科書を見比べて感心したことは、帝国書院の27ページにアジア州の資料図があります。いろいろな意味で中国と日本は切っても切り離せないです。中国は大国で、中国の工業の統計が載っています。東京書籍も同じように載っていますが、特に帝国書院の場合は日本との関わりや世界の中で中国の製品がどう動いているか、周辺世界との関わりという視点で資料がまとめられていて、

生徒に興味を持ってもらえると思えました。東京書籍にも、巻末にそういった内容の資料が掲載されています。全体的には、帝国書院に比べて、グラフや写真、図の資料が大きく、数多く掲載されていてより充実していると思えます。そういった意味で、先生方にとって多様な授業を展開する上では東京書籍の資料が活用しやすいと考えました。一委員として意見を述べさせていただきました。他にございますか。

○教育長 小島委員から、地図は鮮やかな色使いのほうがよいので、帝国書院を推すとの声がありました。冒頭、綱川委員が落ちついた色調が視覚的に目に優しいという評価が述べられました。確かに地図の色合いというのは大事だろうと思えます。ある意味、個人的な好みにもなってしまう気がしますが、色合いはどちらかというところ落ちて目に優しいものがよいのではないかなということから、東京書籍がよいと思っておりますが、色使いのほかの観点も大事です。

昨今、領土の問題が報道等で取り上げられています。生徒にしっかりと日本の領土について理解させる必要があります。その点では、両社ともに北方領土・竹島・尖閣諸島について、日本固有の領土であることがしっかりと明記されているとともに、歴史的背景や現在の状況についても記載されているということで、両社とも生徒にとって理解が深まってよいと感じました。

○永山委員 昨年の小学校の教科書採択でも地図については、小島委員の意見と対立した考えを述べました。その際に、鹿児島に帰省する時に、小学生の子どもたちに日本の地図を覚えさせるために、帝国書院の地図を持たせ、地図を見ながら行ったという話をさせていただきました。私が年をとってきたせいか地図の黄色がすごく目立つ気がして、東京書籍のほうがよいということをお伝えしました。

港区の生徒にとって、地元の港区がクローズアップされていると興味・関心が高まると思えます。東京書籍は六本木の再開発を取り上げていることや東京中心の地図に大使館も文字と国旗が併記されています。一方、帝国書院も東京の中心部の地図や東京タワー、六本木ヒルズとランドマークが掲載されていますが、大使館が文字のみで国旗は併記されていません。また、港区は国際都市として、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックにも大きく関わり、その点は両社とも取り上げていますが、東京書籍は競技会場を図で示し、選手村からの距離も示していて、具体的に生徒がオリンピック・パラリンピックの地図と関連させているイメージで構成されているように思います。

どちらもとてもよいと思えます。昨日、子ども2人にどちらがよいか聞いてみましたが、ずっと見慣れているせいか2人とも帝国書院がよいと言うのでとても悩みましたが、私の個人的な考えでは東京書籍のほうが少しよいと思えます。

○澤委員長 どちらがよいか、なかなか難しい課題です。

○小島委員 永山委員と今回は同じ意見かなと思っていたら、またしてもという感じがします。東京書籍を推す委員ですら、自分の2人の子どもに両社を比べさせると、2人とも帝国書院のほうがよいと言っているのです。教科書は制度上大人が選ぶわけですが、使うのは子どもたちです。子どもたちがこっちのほうがよい、わかりやすいねと言う教科書を我々大人は選んであげなくては

いけない。大人の判断で、今までの本当にすばらしい地図を変えてしまうのはおかしいという気がします。

私が地図の命は色合いと見やすさだと、それしか言いませんでしたが、色合いだけでなく地図そのものを比較してみても、主題図は東京書籍よりも帝国書院のほうが豊富でわかりやすいですし、関係する主題図が同縮尺で書かれているので比較しやすいです。

それから、世界の地図では、同緯度、同縮尺の日本を必ず載せて、例えば、帝国書院の47ページのヨーロッパ中央部のところで、右下に日本の位置、緯度でいけばこの辺だと、ルーマニア、ブルガリア近辺がちょうど日本の北海道と同じですよと。北海道の広さがこれだけだとすると、ルーマニアが北海道と比べてどのくらいかなと、大ざっぱに見て2倍くらいかなとか、非常にわかりやすくなっています。

また、東京都の調査研究資料によりますと、鳥瞰図の量と数、その他の資料も含まれていますが、東京書籍が27に対して帝国書院は44と、本当に子どもたちにわかりやすい鳥瞰図が数多く載っています。

50ページのヨーロッパの資料図を鳥瞰図で見ると、ヨーロッパの高低、どの辺が平野になって、どの辺が山になっているかということが一目瞭然でわかるようになっているのです。これがまた帝国書院のすばらしいところです。歴史地図がまた豊富です。例えば、120ページを開きますと、東京都心部の右側に江戸時代の東京ということで、特に港区は現在の地図と江戸時代の地図、両方も港区は載っていて、港区の中学生にとって、今はこうだけど、江戸時代はどうだったのかなと、大変興味が持てる。色合いだけでなく、地図そのものを比べても帝国書院のほうが良いと私は思います。

○綱川委員 今の日本では、自然災害が多く発生して、痛ましい事故につながっています。災害・防災のページを比較してみたいと思います。資料の豊富さという点では確かに帝国書院のほうが豊富ですが、東京書籍は、東日本大震災の地震と津波の資料や津波避難エリアと避難所マップを載せることで、より現実的に防災意識を高めるようにつくられておりますので、ぜひご覧になってください。

○永山委員 東日本大震災の際に、私が住んでいるお台場では観光客の方がたくさんいらっしゃいまして、実際に中学生が避難所運営のサポートをするなど、日ごろの防災訓練の効果を発揮しました。防災意識を高めるという点では、東京書籍の資料のほうが授業で活用しやすいのではないかと思います。

○小島委員 前回の教科書採択のときに、帝国書院が採用された理由の一つとして、資料の豊富さがありました。災害・防災の関連では、両社とも震災や洪水、火山など様々な自然災害を取り上げていますが、帝国書院は特に都市型洪水への備えが記載されています。その点では、生徒も身近に感じるのではないのでしょうか。

○澤委員長 地図の見やすさや資料の活用のしやすさ、領土やオリンピックパラリンピック、防災等、様々な観点から議論していただき、両社の特徴が明確になってきました。

これまでのご意見から、東京書籍がよいという意見が多かったと思います。

「社会（地図）」につきましては、東京書籍でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○澤委員長 ありがとうございます。「社会（地図）」の教科書については、東京書籍に決定いたします。

次に「社会（歴史）」の教科書についてご意見を伺います。

冒頭に、港区立教育センターで教科書展示会を開催したところ、70名もの多くの方にご来場いただいたとお話しさせていただきました。そのうち55名の方にご意見をいただきました。ご意見の多くは、社会科、特に歴史と公民の教科書に関してのご意見でした。一つ一つ意見を読ませていただきました。

いただいたご意見を参考にしつつ、教科書調査研究を行ってきたことをもとに、慎重に採択を進めてまいりたいと思いました。

いずれの教科書も文部科学省の検定を通っていることから、学習指導要領に基づき編集されている教科書であり、法的にはどの教科書が採択されても問題がないことは皆さんご承知のとおりです。

いただいたご意見の中には、ある教科書について、子どもたちに学ばせたくない教科書というご意見と、逆にその教科書で学ぶべきであると相反するご意見もいただいております。

将来を担う港区の中学生が中学校という学習の場で、彼らが社会人になったときの基礎教養となるものを学ぶのにふさわしい、その基礎教養をもとにして適切な判断ができるような教科書を港区教育委員会としては採択したいと考えております。

この件に関しまして、ご意見ございますか。

○永山委員 歴史の学習に対して、あくまでも個人的な意見ですが、やはり一般的な常識の範囲内でこれからの歴史をしっかりと学んでほしいと思っています。生徒たちが取捨選択できる考え方の中で、歴史とこの後に採択される公民の教科書が採択できるといいと思っています。

○綱川委員 今、永山委員からも意見がございましたように、どの教科書もそれぞれ大変工夫されているとは思いますが、多感な時期の中学生が学ぶ教科書という視点を大事にして、皆様から寄せられたご意見を真摯に受けとめ、公正に協議し、採択をしていきたいと思っております。

○小島委員 中学校の歴史教科書は、初めて本格的に学問としての歴史を学ぶ中学生が使用する教科書です。その点を特に重視し、よく考えなくてはいけないと思います。歴史としての学問、歴史学の長年にわたって研究されてきた成果や通説に基づかなければならないと思います。

ですから、まだ評価の定着していない考え方、あるいは評価が分かれたり割れる考え方については、中学生はまだ能力的に批判するものを身に付けていないので、中学生の教科書の内容としてはふさわしくないと考えます。

したがって、このような内容の教科書は港区の歴史の教科書としては不適切で、採択すべきではないと考えます。

○教育長 考え方としては、私もそれで異論はございません。別の視点から個別に話をしたいと思

います。各教科書を見て気になったのは、用語の使い方です。学習指導要領の観点から考えて、例えば日本の歴史の中で大和朝廷のことがどの教科書にも記載されています。「大和」が漢字で表記されている教科書と片仮名で表記されているものがあります。使い分けているのは、恐らく様々な歴史認識や歴史学の進展ということでもそれぞれの意味があるからだと思いますが、少なくとも学習指導要領では漢字で書かれていますので、漢字の表記がいいのではないかと思います。具体的には、漢字で表記されているのは東京書籍、学び舎、教育出版、育鵬社、自由社です。片仮名で表記されているのは、清水書院、日本文教出版、帝国書院です。

○綱川委員 今、教育長が触れられましたが、同じ古代に着目してみたいと思います。皆さんご存じのように、平成20年3月に学習指導要領が告示されました。その中には、神話・伝承などの学習を通して、当時の人々の信仰やものの見方などに気づかせることが記載されています。この扱いは各社特徴がありますが、特に教育出版の教科書は、神話にみる古代の人々の信仰とものの見方がトピックになっており、当時の人々の信仰やものの見方がわかるようになっています。

○教育長 各時代をどういう比率で扱っているかが、東京都の教科調査研究資料や港区の選定研究資料にもありました。これを見ると、各社ともに近代史を扱う比率が高く、中でも教育出版が41.3%、104ページ、次いで学び舎が39.4%、112ページの順に高いです。

清水書院や自由社、育鵬社は古代の扱いが若干多いのが特徴です。その反面、中世の扱いの比率が少し低くなっていました。一方、東京書籍、帝国書院、日本文教出版は、それぞれ教科書によって、古代、中世、近世、現代をある程度平均的に取り扱っています。時代を扱う比率で各社の特徴が表れていると思います。

○綱川委員 先生方の教えやすさの観点から言いますと、学習の流れが重要になります。天平文化を例にすると、天平文化の説明を単純に解説する教科書が多くある中、教育出版は貨幣の流通や国の発展との関連から、遣唐使を派遣し、仏教や仏教文化を学ぶことのかかわり、それらのことにより天平文化が栄えたことが書かれているという構成になっています。他の教科書に比べると、天平文化が生まれた背景が読み取りやすく、時代の流れが理解できるようになっていると考えました。

○教育長 歴史の分野においては、言語活動が大切になります。その点から言うと、東京書籍は各章の終わりに見開きのページで各時代を確認する課題があり、言語活動の充実が図れる工夫がされていると感じました。

また、「深めよう」のページで「考古学のとびら」が60ページに、「歴史の中の大地震」が270ページにありまして、専門性が高く、興味のあるテーマを取り上げて、発展的な内容も取り扱っていると思います。

それから、教育出版は、説明する、伝え合う、要約するなどの言語活動の事例が多く記載されています。具体的には、章の終わりの学習のまとめと表現において、例えば、85ページでは自分なりの言葉で説明しようという言語活動を促す課題が設定されています。また、81ページでは「歴史の窓」という囲みで、庭園づくりに活躍した人々や龍安寺の枯山水の石庭について写真等の記載があり、生徒の興味・関心を引きつける工夫が多くされているとともに、問題解決的に授業が展開

できる工夫がされていると思います。

帝国書院は、各ページに「確認しよう」「説明しよう」があり、言語活動を行いながら学習を深められるように構成されています。

○澤委員長 昨今、アクティブ・ラーニングということが盛んに言われていますが、そういう視点から見ても言語活動は非常に重要です。

○永山委員 先ほど教育長も言われておりましたが、教育出版は特に伝え合う言語活動を最も多く取り上げている点で評価できるのではないのでしょうか。

○小島委員 教育出版は、見開き2ページで、冒頭部分で常に学習課題が載っていて、章末部分には振り返りの課題が明示されており、構成が一貫して統一されていて非常に勉強しやすいと。また、本文の記述を読んでも、非常にわかりやすく、生徒も理解しやすいと思います。また、紙面の構成も大変よいと思います。各章末の学習のまとめと表現では、時代を体感することができる課題が設定されていて、歴史の流れを大きくつかむ、歴史にとって非常に大事な視点からきめ細かにつくられていて役立つという観点から、私も教育出版が一番よいと思います。

○澤委員長 言語活動に関連して、歴史について考察する力や説明する力を港区の子どもたちに身に付けさせたいという思いがあります。特に、港区の場合、現在、小中一貫教育、実際には幼稚園も入れた一貫教育を重点に置いておりますが、特に小学校で習った社会科の学習を生かして関連付けるという考えの視点では何かございますか。

○綱川委員 小島委員からもありましたが、生徒にとって、教科書がどういう見せ方や読ませ方を、いかに興味を持たせて学習につなげていくかということも大事だと思います。その視点から言いますと、東京書籍、帝国書院ともに、導入部分で歴史上の人物をアニメ調のイラストで紹介しています。

一方、教育出版は、小学校の教科書で登場した人物であることを本文中マークで示しておりますので、小学校の歴史学習との関連・接続を図る意味でとても有効であり、学びを確認できることがよいと思います。

澤委員長が言われたように、港区では小中一貫、小中連携の学習を推進していますので、自ら学びを確認できる点で、教育出版が港区の子どもたちの教科書としてはふさわしいと思います。

○澤委員長 我々の時代は、歴史というと何年に何が起こったかという年号を覚えることにかなりエネルギーを使いました。そういったことが大学の入試にもメインとして出ました。今は、世界の中で日本がどういう立場にあって、その中で日本はどうしていかなければならないのかということを考えてもらう意味でも、歴史は非常に重要な位置付けにあると思います。

そういった視点で言いますと、言語活動のしやすさや小中一貫という視点でも、教育出版が港区の教科書として適しているのではないかと大勢としては判断できますが、「社会（歴史）」につきましても、教育出版でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 「社会（歴史）」の教科書につきましては、教育出版に決定いたします。

次に、「社会（公民）」の教科書について、ご意見を伺います。

公民の教科書につきましても、歴史と同じように、いろいろ注目されていますが、歴史と同様の考えで採択を進めていきたいと思います。

○教育長 公民の学習では、先ほども触れましたが、対立と合意、効率と公正などを取り上げて、現代社会を捉える見方や考え方の基礎を養う学習を重視してきました。今回、7社の教科書を見ても、人権尊重の立場から、対立から合意に至るまでの過程と考え方の変化が読み取れるように構成されている教科書が多いと思いました。

先ごろ、18歳での選挙権に関わる法律が成立したこともあわせて考えますと、今後、より一層公民学習の必要性が増してくると思います。その意味で、港区の子どもたちにとってよりよい教科書を選びたいと思います。

○小島委員 私も教育長と同じで、公民の学習は今後ますます重要になっていくと思います。公民の学習で大切なのは、やはり個人の尊厳、基本的人権の尊重をもととした民主主義の考え方を深く理解し、国民主権を担う公民としての基礎的な教養を養うことだと思います。

そういう点から言いますと、清水書院が非常に素晴らしいですね。「学習のはじめに」という巻頭の次に序章として「私たちと現代社会」があります。「学習のはじめに」では、公民とは何なのか、どういう役割になるのか、どういうことが大事なのかをまず意識させ、個人と社会の関係における公民の役割、そういう考え方からどうして民主主義という考え方が出てくるのか、そして社会のメンバーとして、公民として力強く生きていくためにはどうしたらいいのかということが、非常に単純明快に子どもたちによくわかるように書かれております。

序章では、「私という奇跡」というところから、最後は「持続可能な未来」というところまで、まず自分のことから、次に身の回り的人、それから社会、そして世界へという視点に子どもたちが自然に流れるような内容に工夫されていて、港区の子どもたちに読ませてあげたい、学ばせてあげたいなと感じました。

そして、民主主義社会においては、その意識が非常に大事です。そのあり方として対立と合意、効率と公正という考え方が非常に重要な課題になってきます。そういう点で、全ての教科書では、第1章の現代社会において、現代社会を捉える見方や考え方の基礎を養うことを狙いとして、対立と合意、効率と公正を取り上げています。

ところが、自由社だけは第1章ではコラムで取り上げるだけで、最終章でディベートの活用例として、政治の仕組みや環境問題の政府の対応を議論していくという取り上げ方をしています。他の7社とは大分違った取り扱いをしていて、これでいいのかなと疑問に感じました。

○永山委員 私も、対立と合意、効率と公正について注目して、全ての教科書で第1章を中心に読んでみました。部活の活動場所や合唱コンクールの練習場所の話し合いをテーマにしているのは、清水書院と東京書籍、日本文教出版。文化祭の劇の主役の決め方など、身近な学校生活について取り上げているのが育鵬社でした。これらのテーマは、中学生にとって身近な話題かと思います。

一方、マンションの駐車場や駐輪場、スロープの費用やごみ置き場など、マンション関連の問題

についてテーマにしているのは、教育出版、帝国書院、東京書籍でした。共同住宅が9割を超す港区の特徴を考えると、中学生のうちからマンションの問題について考えることは必要があると思いました。いずれも、学習指導要領の趣旨に則って学べる題材であると思いました。

○**綱川委員** 私も同じ観点から、教科書がどのように取り上げているかを見てみました。ページ数の問題だけではないのですが、これまで港区で使用している東京書籍は、漫画を使った導入から8ページにわたって具体的に意見や解決の方法などが詳しく取り上げられています。日本文教出版も、4コマ漫画などを取り入れてわかりやすい例示をしています。東京書籍の方が解決に向けた取組を3つの例で示し、中学生に考えさせるような、大事な投げかけをしているのがよいところだと思います。

○**小島委員** 私も、これまで使用している東京書籍の説明が本当に大変わかりやすく、子どもたちにも理解しやすいと感じました。

章末のまとめとして、共生社会を目指していくために、対立と合意、効率と公正という考え方を理解し、それを養っていくことの大切さをさらに強調しています。他のページにおいても、言語活動としての「公民にチャレンジ」というコーナーの「公共の福祉について考えよう」というコラムでも、効率と公正について再び考える機会を設定して、繰り返しこの問題を取り上げておりますので、学習の効果も上がります。民主主義社会における物事の決め方のいかに民主的・合理的にという非常に大事な部分を懇切丁寧にわかりやすく述べておりますので、この点では東京書籍がよいと思います。

○**澤委員長** 小島委員にお伺いします。先ほど全体的な流れのお話の中では、「学習のはじめに」という教科書としてのイントロダクションでは清水書院が非常によいというお話でしたが、対立と合意などの中身については東京書籍ということですか。

○**小島委員** 対立と合意、効率と公正というのは、公民の中で非常に大事な部分で、その部分を読み比べますと、東京書籍が一番詳しくわかりやすく丁寧なので、この部分では東京書籍がよいと考えます。これは公民の中でも非常に大きな役割を果たしています。

しかし、公民としてのあり方、子どもたちへの投げかけ方、自分が公民としてどうやって生きていくのか、どうやってこの社会に自分は役割を果たしていくのか、未来や持続社会に対してどう役割を果たしていくのかという視点では、清水書院が非常にすばらしいので難しいですが、清水書院のほうが全体的にはより良いと思います。

○**教育長** 公民の教科書というのは、どうしても知識中心の解説に終始しがちな傾向がある中で、言語活動が大切です。東京都の調査資料で、それぞれ現代社会、経済、政治、国際社会とある公民分野で、言語活動を取り上げている部分については183ページに記載されています。

この中で見ると、言語活動を取り上げている箇所数は、東京書籍が195カ所で一番多いです。2番目に多い帝国書院の144カ所と比べても圧倒的に言語活動を取り上げていることがわかります。また、人権・平和について考える人権作文などを掲載しており、そこから自分の考え方を深める活動に展開できるような設定になっていることがよい点だろうと思います。

○**永山委員** 言語活動という視点では、先ほどの歴史の中では教育出版が最も多く取り上げられていましたが、レポート作成の手順や書き方等が丁寧にまとめられているのは東京書籍と日本文教出版でした。両社とも巻末に特集を組んで、レポート作成の手引きや考察の仕方などの取り組み方を示しています。このことは、公民だけでなく、歴史や地理、他の教科・領域においても、思考力、判断力、表現力の育成のために活用できる力となると思います。

○**澤委員長** ここまで、いろいろな視点からのお考え、対立と合意、効率と公正という民主主義の原点についてご意見をもらいました。後半は言語活動でした。対立と合意といった視点では綱川委員から東京書籍、小島委員も対立と合意という視点では東京書籍だが、全体から見ると清水書院というお話でした。教育長は、言語活動に重点ということでは東京書籍、永山委員も東京書籍ということで、なかなか難しい選択ですが、全体としては東京書籍ということにしたいと思います。

「社会（公民）」につきましては、東京書籍でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○**澤委員長** ありがとうございます。「社会（公民）」の教科書につきましては、東京書籍に決定いたします。

議事の運営上、一旦ここで委員会を休憩させていただきます。再開は午後1時といたしたいと思います。よろしくお願いします。

（休憩）

○**澤委員長** それでは、休憩前に引き続きまして委員会を再開いたします。

次に、「数学」の教科書についてご意見を伺います。

○**永山委員** 数学については、港区の中学校すべてで少人数指導による習熟度別指導を行っていることから、指導が効果的にできる教科書がよいと思います。

問題量が充実しているのは数研出版と日本文教出版ですが、数研出版は、問題が豊富にあり習熟の程度に応じた使い分けができると思います。巻末には総復習のページがあり、基礎基本の徹底と応用力の育成が図れると思います。

一方、日本文教出版も量を重視した編集になっていますが、章末問題を基礎基本の定着を図るための問題から発展的な問題までの4段階に分けて構成しており、充実しています。

大日本図書は、基本問題や穴埋めの問題を多く取り入れているのが特徴的だと思いました。数研出版、日本文教出版の2社に比べるとやや基礎的事項に重点を置く教科書であるという印象を受けました。

○**綱川委員** 啓林館と東京書籍の両社は、キャラクターの吹き出し等を用いて問題を解く際の考え方やヒントを多く示していると思います。これらの教科書は自学自習に適していると思えるので、生徒が主体的に学習するのによいと思います。

特に、東京書籍は「例」と「問い」の間に「たしかめ」を置き、基礎基本が確実に身に付くよう

になっています。章末の問題も段階的に難易度が上がる配列となっているのも効果的に学習を進められると思いました。

○小島委員 港区の中学生の学力テストの正答率を見ますと、東京都平均や全国平均より高いので、港区の中学生の数学の理解能力は平均より高い傾向にあるわけです。そうしますと、港区が採用する数学の教科書は、平均よりも高いレベルの生徒にもマッチする教科書でなくてはならないということになります。

啓林館の場合は、基本的な問題も数多くありますし、さらに発展的なやや段階の高い問題も非常に多くあります。発展的な問題で生徒の力を伸ばすことができるので啓林館が一番よいと思えます。

いろいろな例題から問題の流れが細かい段階に分かれて配列されていて、非常に丁寧に学習が進められ生徒にはわかりやすいです。スキルといった発展的な内容については巻末に「ひろがる数学」として取り上げられております。別冊の「Math Navi ブック」も既習事項の確認や小学校との系統性が非常にわかりやすく、生徒の興味や関心を引く題材が多くて、少人数指導を行っている港区の実態にあわせると啓林館の教科書が一番よいと思っております。

○澤委員長 例題や問いのほかにも各社が工夫して編集している点があります。特に、知識技能を活用して自から課題を発見し解決する姿勢も重要視されております。生徒が主体的に学習に取り組むには、興味や関心を持って学習が進められることが大切ですが、その点についてはいかがですか。

○永山委員 数研出版の「数学探検」、教育出版の「数学の広場」「数学ミニ辞典」、啓林館の「数学広場」、日本文教出版の「数学のたんけん」、学校図書の「クローズアップ」など、各社、学習内容に関連したさまざまな内容を取り上げ、数学に対する興味・関心を高める工夫をしていると思えます。

中でも大日本図書の「社会にリンク」と東京書籍の「社会とつながる」は、社会や職業における数学の活用を取り上げているために、数学を学ぶ意義やよさを実感することができると思えました。数学の学習を将来の職業につなげるという視点からも、この2社の教科書は中学生に使わせたい教科書だと思います。

○澤委員長 主体的な学習を進める上でどのような学習活動をするかということも大切だと思いますが、その点についてはいかがですか。

○教育長 永山委員から、各社の様々なコーナーについてそれぞれ工夫をしているというお話がありました。数学においても学習指導要領では言語活動の充実をすることの必要性が示されています。本文の中に自分の考えを説明したり、記述したりするという活動は各社教科書ともに取り入れていると思えますが、中でも学校図書と東京書籍がこの面では充実しているのではないかと思います。

学校図書では、巻末でさらなる数学の協同学習のページを表現する力を身につけようとして記載がありますし、レポートや自由研究に取り組みさせることで、言語活動の充実を図ることができるようになっているということで評価したいと思います。

東京書籍では、章末の「活用の問題」で、例えば第1学年の教科書の81ページに基石の並べ方

について、それぞれ考え方を事実、方法、理由などを記述することを具体的に導くように指示している点がよいと思います。これによって、生徒たちの思考力や表現力が高められると思います。

○**綱川委員** 先ほど、啓林館と東京書籍は自主的に学習できる教科書だと発言しましたが、小学校でも使用している東京書籍は問題解決学習にとりわけ力を入れている教科書ですので、より生徒が主体的に学習できる教科書だと思います。「考えてみよう」「調べてみよう」など取り組む際の活動の狙いをわかりやすく示していますし、さらに「学び合い」のページでは、側注に問題解決の進め方を示し、学び方が身につくようにしています。常に問題解決型で学習を進める編集方針となっていることから、港区の中学生には、将来の大学入試制度改革を見据えても、思考力・判断力・表現力を育成するのにふさわしい教科書であると思います。

○**澤委員長** 東京書籍を強く推す意見だったと思いますが、現在使用しているのは啓林館です。先ほど、小学校算数との連携の視点からのご意見がありましたが、港区ではMINATOカリキュラムを作成し、算数と数学の系統性を重視しています。小中一貫教育の視点から、現在使っている啓林館についてご意見はいかがですか。

○**小島委員** 啓林館も第1学年では小学校の算数のまとめや復習のための問題を多く取り入れていますが、特に別冊の「Math Navi ブック」で小学校との系統を重視しております。そういう意味では、小中一貫の港区の場合においても啓林館の教科書はどの小学校の教科書にも対応できる内容に十分なっていると考えております。

○**澤委員長** 小学校での学習内容や学習方法を活かして、問題解決的な学習に取り組むことで思考力や表現力を高めるという点では問題解決的な学習と系統的な学習を積み上げていく教科書がよいと思いますが、他にいかがでしょうか。

○**綱川委員** 啓林館も「節のとびら」では「自分の言葉で考えよう」や「みんなで話し合ってみよう」というように学習活動を示しているので、問題解決的な学習を進めることができると考えます。

一方、東京書籍は先ほど述べたような問題解決的な学習が一連の流れで進んでいます。さらに、「学び合い」に対応したノートの記述例を示すとともに、「レポートにまとめよう」で振り返る活動を促している点もよいと思います。

両社を比較すると、東京書籍の方がよりよいのではないかと考えています。

○**永山委員** 各社それぞれよい点があることがわかりました。学習の流れが丁寧に示されていれば、若手教員が多い港区でも問題解決的な学習ができると思いますので、私も綱川委員と同じく東京書籍がよいのではないかと思います。特に、数学に苦手意識のある生徒でも自ら学習に取り組んで習熟を図ることができる点が特によいところだと思いました。

○**澤委員長** 第1学年の数学で初めて負の数が登場します。数学の場合はご存じのように中学になって急に嫌になってしまう生徒もいると思います。

その一つが、小学校ではなかった負の数という新しい概念をどうやって理解してもらうかです。生徒たちにその概念をつかんでもらうことが重要だと思います。東京書籍は、正の方向、負の方向という考え方、概念を使ってプラス・マイナスそしてマイナスの数のある計算を生徒にわかりやす

く説明していると思います。もちろん、この正の方向、負の方向というのは東京書籍だけではなくて、学校図書などにもありますが、啓林館の場合には従来どおりの説明になっていると思います。

ただ、3年生の二次方程式の考え方で、啓林館は自分の生まれた日がXだとすると、7日前はXマイナス7と7日後はXプラス7で、Xマイナス7とXプラス7を掛けると、49になる。そのまま二次方程式はXの2乗イコール幾つとなる。だから、すぐ答えが出ます。二次方程式をそういう答えの出しやすいものから導入しています。

東京書籍や他の教科書は、ひもの長さの全体が何メートルで、それで長方形を作ったら面積はどうかという問題で、 $X^2 - AX + B = 0$ という方程式ですから、すぐ解が出てこない方程式から始まっています。そういう点では啓林館のほうが生徒には入りやすいのかなと思います。

委員長として皆さんのご意見を総括すると、綱川委員が2回にわたって東京書籍、永山委員も東京書籍、教育長も学校図書と東京書籍を出されていますが、東京書籍の方が思考力、表現力を高めることができ、ふさわしいのではないかということで、「数学」につきましては、東京書籍でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 対立と合意というルールで「数学」の教科書につきましては、東京書籍に決定いたします。

次に、「理科」の教科書についてご意見を伺います。

○教育長 数学については港区の生徒の学力は高い水準にありますが、一方同じ理数といっても理科についてはいろいろな学力調査等の結果から見ても、教員に話を聞いても課題であると認識されています。

そういう中では、観察・実験の結果をしっかりと見て、そこから分析をして解釈する力を育成していくことが必要だろうと思います。生活の周辺にある身近なことから科学についての興味、関心を持たせるということが出発点になると思います。科学の楽しさを日常生活から体験して身につける。そこから科学的な思考力・判断力を培うことにつながる問題解決学習を重視している教科書、これを採択したいと思います。

○澤委員長 そういった視点で各社の教科書を見ますと、写真やグラフなどが本当に鮮明で、科学でのいろいろな資料が豊富に取りそろえられています。

○綱川委員 基礎・基本の定着の観点から見ますと、各社とも単元末に練習問題を設けていますが、啓林館の別冊ではマイノートを添付しています。このマイノートが各学年とも80ページ前後の分量があるとともに、今回の改訂でカラー刷りになり、生徒の意欲を高める紙面構成になっていると思います。学習内容の整理を行うには大変効果的だと思います。

○小島委員 私も綱川委員と同意見でマイノートが非常によいですね。観察・実験で得たことを、理科で役立つ力につなぐサイエンスアプローチと理科で学んだことをしっかりと定着させ、応用できる力を身につけるステップアップの2部の構成になっており、非常に使い勝手もよく理科の力を身につけるのに非常に役に立つと思います。

○澤委員長 啓林館のマイノートについてご意見をもらいました。以前は、第一分野と第二分野で教科書が分かれていましたが、前回の教科書改訂より教科書が1冊になりました。内容の配列の点についてご意見はございますか。

○教育長 東京書籍と大日本図書については、第一分野と第二分野をうまく組み合わせて編集しているので、生徒にとっては使いやすいのではないかと思います。

○綱川委員 学校図書と教育出版は従来からの第一分野と第二分野を意識して、教科書の前半に第一分野を後半に第二分野を配置しています。高校への学習のつながりを考えた場合には、第一分野と第二分野の領域を意識して指導した方がよいと思います。

○小島委員 私も教科書の構成としては、第一分野と第二分野の区分があるほうがよいと思います。その中でも特に啓林館がよいように思います。理科の学習は、本来観察することから学習が発し、そして人為的に条件を制御した実験へと発展していきます。啓林館はこのことを踏まえ、観察を重視する二分野の学習内容を前半に配置していると推察します。教科書会社の理科に対する理念のようなものを感じます。年間計画を組み立てやすい点からも、若手教員の多い港区の実態に即している印象を受けました。

○永山委員 身近な題材を使っているという観点では、教育出版の2年生の原子の周期表では、身の回りの物質がどの原子でできているかを記載しており、生徒の興味を引くものになっているのではないのでしょうか。

○澤委員長 理科の学力を本当に身につけるためには、観察・実験の結果をしっかりとレポートにまとめることが大切だと思います。その点についてのご意見はございますか。

○永山委員 私も澤委員長がおっしゃるとおり、観察・実験の結果をしっかりとレポートにまとめることが大切だと思っております。

観察・実験やレポートについての観点でいいますと、東京書籍は、実験の手順についてステップ式にまとめられていてわかりやすく説明していると思います。教育出版は、身近な現象を題材として実験や観察が行いやすい内容を多く取り扱っています。また、実験時の注意点が朱書きされているため、大切なポイントをつかみやすいです。

○教育長 小学校からの学習のつながりというものも大事だと思います。この点で、学校図書が各単元の導入に見開きのページを用いて小学校からの学習のつながりを写真付で詳しく解説し、小学校からのつながりや系統性がわかりやすく示されていると思います。

また、観察・実験の進め方と題して、巻頭に目的、計画、観察、実験、結果といった項目ごとに記載するポイントが書いてあるため、自分が理解するためでなくて、読み手を意識したレポートを作成できるような工夫がなされています。

○永山委員 補足ですが、大日本図書のよい点は、観察と実験で取り扱う機具が基本操作を随所に記載し、実験結果を生かしたレポートの書き方についての例示があり、大変見通しが持ちやすい構成になっている点だと思います。

○小島委員 啓林館は、身近な疑問を発見させ、それを実験で解決していくような流れで学習が構

成されています。実験からわかることや、実験結果が簡潔にまとめられており、考察を含めたレポートが書きやすい印象を受けました。また、観察・実験の目的が明示されており、生徒が課題を捉えやすいと思います。生徒が課題をしっかりと捉えて観察・実験を行うことは、結果からの考察、考察からまとめへと生徒の思考の流れに沿って学習することにつながるとと思います。港区の生徒の課題である観察・実験の結果を分析し、解釈する力を育成する点から見て、啓林館の教科書は実態に即しているのではないかと思います。

○**綱川委員** 小島委員が言われるとおりの、観察・実験の結果を解釈する力を生徒につけさせるためには、私も啓林館が港区の中学生には合っている印象を持ちました。さらに、啓林館は第一分野と第二分野の最終単元を地域・環境資料集「サイエンストラベラー」としてまとめている点も興味深いです。

地方ごとに特色を紹介しながら、第一分野と第二分野のまとめを有機的に結びつけ、自然環境の保全と科学技術の利用を大変うまくまとめ上げています。今後の理科教育においては、環境保全の視点を踏まえて指導することが大切だと考えます。

○**小島委員** 大学の入試制度の改革を視野に入れて考えますと、理科の学習にとどまらず数学などと複合的な学習をしていくことが、今後の大学入試改革に対応するのに必要だと考えています。

そういった視点で見ますと、啓林館は「理科でよく使う算数・数学」と題して公式等を載せ、理科と数学を関連して学習できるような工夫が図られているので大変よいと思います。

○**澤委員長** 私も一委員として述べさせていただきます。今回は学習指導要領が変わっていないので、前回と今回で何が進歩しているのかという視点で見ました。一番わかりやすいのは啓林館の1年生の光による現象で、新しい平成28年度版では178ページ、今現行版では158ページです。現行版は実験がすぐ始まりますが、平成28年度版は光ってどんな現象なのか3ページにわたって丁寧に書いてあり、そこから実験に入ります。

そして、各社とも大事にされている振り返りというところで、小学校のどこで何をやったのかが現行版よりもさらに詳しく述べられています。学習指導要領は変わっていないが、教科書は進歩していると感じました。皆さんの意見を総合しますと、各社それぞれよい特徴がありますが、「理科」につきましても、啓林館でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○**澤委員長** 「理科」の教科書につきましても、啓林館に決定いたします。

次に、「音楽（一般）」の教科書についてご意見を伺います。

○**小島委員** 学習指導要領では音楽科の目標を「表現及び鑑賞の幅広い活動を通じて音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」と設定しています。

教育出版も教育芸術社も随所に工夫が見られます。

教科書の裏表紙の扱い方を見ると、教育出版はヴァイオリン奏者、演出家、津軽三味線奏者と個人の活躍を全面に出しています。一方、教育芸術社は、日本各地で開催される音楽祭や、音楽

にまつわる歴史を学べるきっかけづくりとしてスメタナホールのある市民会館、世界遺産にも登録されたヴェローナの中心市街地での音楽祭を取り扱うなど、さまざまな視点で音楽を捉えています。

○永山委員 選定資料にもありますように、どちらの教科書も生徒の興味・関心を引くために、図や写真を多く取り上げていて、曲にイメージを広げやすく編集されています。その点で考えると、この裏表紙の扱い方は生徒が初めて音楽の教科書を手にしたときの興味・関心に影響されるのではないのでしょうか。教育出版は、第一線で活躍されている方も素敵ですが、教育芸術社は多角的な視点で音楽を捉えることが大切な視点だと思いました。

○澤委員長 裏表紙の扱い方が2社で違うという、生徒の興味・関心を引きつける視点でのご意見いただきましたが、他にございますか。

○綱川委員 私は、教育芸術社の「音楽学習MAP」が3学年分ともに、目次の次のページに設定されているところに注目してみました。このMAPには学習教材が「歌唱」「創作」「鑑賞」に分類されて示されており、学習目標のまとめりや学習内容が整理して記載されています。

教育出版でも、目次に学習目標のまとめりが配色とイラストで明確に示されていますが、イラストマークの意味が少しわかりづらい印象を受けます。

○教育長 平成28年度の都立高等学校の入試で、学力調査を5教科で実施した場合に実技教科の内申書の評定を2倍にすると伺っております。このことから言えば、音楽に限らず実技教科を大変重視をしていることがわかります。1時間ごとの学習内容を先生も生徒も明確に把握した上で、何を指導したのか、何を学んだのかが教科書で確認できる工夫が必要になると思います。

この視点で考えると、教育芸術社の「音楽MAP」はある程度効果的なのかなと考えられます。

○綱川委員 教育出版のページ構成を見てみますと、写真と歌をつなげて子どもたちの感性を高める工夫がされていると思います。例えば、1年生で学習する「夏の思い出」は、尾瀬の風景や水芭蕉、シャクナゲの写真を紹介していて大変情緒豊かなものだと考えます。

○小島委員 歌唱の部分では、2社とも日本の曲と外国の曲をバランスよく取り上げています。また、我が国や郷土の四季など自然の美しさを感じることでできるイラストや写真が掲載されていると思います。

○永山委員 例えば「赤とんぼ」の曲ですが、教育出版は見開き2ページを使って歌詞と楽譜に分けて示しています。歌詞の意味や作詞者の曲に対する思いが描かれていると思います。教育芸術社も同じような内容を示してありますが、作詞者の言葉が語りかけるような表現で示されているので、子どもたちへのメッセージとして強く伝わり、それがより心を込めた歌唱指導につながると思います。

○綱川委員 音楽に対する感性を豊かにする視点では、教育芸術社の方が効果的な構成になっているかとも思います。

○小島委員 私は、鑑賞の取り扱いに注目してみました。教育出版では、1年生の教科書の巻末に見開き3ページにわたって楽器を演奏している姿と楽器の説明があって工夫されていると思いました。

○**綱川委員** 港区の中学生の観点からみますと、教育芸術社は2、3年の上巻で「オーケストラの演奏」と題して紹介しています。港区の中学校ではサントリーホールで音楽鑑賞教室を開催していますので、教育芸術社の方が全体の演奏者を紹介しているため、鑑賞教室との連携で教育的にはインパクトがあるように思えます。

○**澤委員長** 選定資料等をもとに、教科書ごとに内容の取り扱いなど様々な視点からご意見をいただきました。

2社ともなかなか甲乙つけがたい良さがありますが、その中で綱川委員、教育長が違った視点で「音楽学習MAP」は子どもたちが音楽を学ぶ上で非常に役に立つのではないかと。それから、永山委員も赤とんぼの曲に対するアプローチが教育芸術社の方が子どもたちにメッセージとして強く伝わり、歌唱指導にも役に立つというご意見等を総合しますと、僅差ですが教育芸術社が大勢なのかなと思います。

「音楽（一般）」につきましては、教育芸術社でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○**澤委員長** ありがとうございます。「音楽（一般）」の教科書につきましては、教育芸術社に決定いたします。

次に、「音楽（器楽合奏）」の教科書についてご意見を伺います。

○**綱川委員** 教育出版、教育芸術社ともに、洋楽器と和楽器をバランスよく取り上げられております。前半には各楽器の取り扱い方を、後半には外国の曲と日本の曲を取り上げております。全体のバランスは2社とも素晴らしいのですが、やはり先ほど採択いたしました音楽（一般）と同様に、教育芸術社が目次の次に「音楽学習MAP」のページを設定し、学習のまとめや学習内容が整理して記載されているところがよりよいと思います。見通しを持って学習する上ではこれが大変よいと考えられます。

○**教育長** 外国の音楽の曲数と資料数に視点に置いてみますと、教育芸術社が198曲紹介されています。

大使館も多く、国際色豊かな港区の地域性などを考えますと、もちろん日本の伝統的な音楽に触れさせることも大切ですが、さまざまな国の音楽の良さを日本との違いに目を向けることも大事だと思います。

○**永山委員** 教育出版社は、各楽器は演奏方法について指先をクローズアップした写真を多数用いてわかりやすく説明しています。また、楽譜も鮮明で見やすく、写真もさまざまな角度からの指の動きを捉えているので、初めて楽器を手にする生徒にとっても効果的だと思います。

○**小島委員** 教育芸術社は、各楽器の演奏のページに「音を聴いて確かめよう」というコーナーを設定しています。音を合わせるときのコツや音を聴くときのポイント、響きの違いについて解説してあるので、学習内容の充実につながると思います。

○**綱川委員** このコーナーがあることにより、より一層子どもたちが様々な楽器の演奏への興味・関心を高めたり音楽の素晴らしさを実感できるので、大変よいのではないかと思います。

○**教育長** 教育出版は、リコーダーの歴史を地図や発掘された遺跡を通して紹介したり、日本の楽器と音楽について歴史的な背景をもとに写真や解説文を入れながら表わしているところが印象的です。他教科と関連性を持たせた内容で、発展的な学習につながると思います。一方で、教育芸術社は琴の演奏では、見開き2ページを使って弾くときの姿勢と構え方、基本的な奏法が一目でわかるような工夫がございます。

教育出版でももちろん丁寧に取り扱っていますが、全体の姿勢とそれに合わせた指使いまでわかりやすいので、楽器に対する興味・関心が高まり、実際に自分も演奏してみたい気持ちになる効果があるのかなと思います。

○**永山委員** 2020年に東京で開催されるオリンピック、パラリンピックに向けて、おもてなしの心で日本の伝統音楽を紹介したりする際にも、教育芸術社のように日本の伝統文化をより重視している教科書だと安心して子どもたちに指導できるのではないかと思います。

○**澤委員長** 選定資料等をもとに様々な視点から、教育出版のよいところ、教育芸術社のよいところを伺いました。綱川委員が、音楽学習MAPは生徒たちが器楽合奏等勉強する上で非常に参考になるのではないかと。教育長から港区に大使館もたくさんあり、生徒たちが外国の人と触れあう機会も多いという視点から見ると、諸外国の音楽や資料の取り上げている数が非常にたくさんであること、先ほどの小島委員からの音を聴いて確かめようというコーナーがある。そういったことを総合しますと、「音楽（器楽合奏）」につきましても、教育芸術社でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○**澤委員長** 「音楽（器楽合奏）」の教科書につきましても、教育芸術社に決定いたします。

次に、「美術」の教科書についてご意見を伺います。

○**教育長** 3社とも多くの作品例が掲載されていて大変よいと思います。生徒が作品を鑑賞する上で作品例が多いということは、一つの重要な視点だと思います。学習指導要領では、美術科の目標として、「感性を豊かにすること、豊かな情操を養うこと」があります。生徒の豊かな情操を養うことができる美術の教科書を採択したいと思っています。

○**小島委員** 私も、今の子どもたちに豊かな情操を養うことは必要だと考えます。その点から私が注目したのは、3社の教科書の表紙の裏です。

開隆堂や日本文教出版は、折り込みページを使ってダイナミックに美術の学習を学ぶ意味について説明文と写真を使って表現しています。

光村図書は、シンプルですが1枚の絵を用いて表現しています。谷川俊太郎の詩を活用し、感じたことを自由に生徒に話し合っ感じさせる工夫がみられます。また、3学年とも教科書の表紙の裏に谷川俊太郎の詩を取り入れています。谷川俊太郎の詩は、小学校の国語の教科書や学校の図書館等でも紹介されている馴染みの詩人でもあります。他教科との関連性からも大変よいと思います。

○**永山委員** どの教科も、その授業の目標やねらいを明確にしたり、授業を通してどのような力が身に付いたのか、先生も生徒も意識することが大切だと思います。また、美術と他教科との関連性も踏まえた教科書だと子どもの学びが深まると思います。

○**小島委員** 表現活動の中で「自分と向き合う」と題したページがあります。多感な時期の中学生にとって自分と向き合うことはとても大切なことです。光村図書の2・3年の教科書では、見開き2ページを使って自画像「今を生きるあなたへ」と題して表しています。今を生きる、この言葉はとても印象的です。また、「手紙～拝啓十五の君へ～」の歌を取り入れているのが特徴的です。中学生への心温かいメッセージだと思います。

○**教育長** 開隆堂も同じように「自分と向き合う」と題したページがあります。ここでも、自分自身にじっくり向き合ってみる大切さを踏まえて、今の自分を表現するように書かれています。

○**綱川委員** 日本文教出版でも、「私との対話」の中で自分の姿を見つめて考えたことをもとに、今の自分の気持ちや将来の夢を表わすなど、表現の構成をねろうと学びのねらいを設定しています。生徒作品に作者の言葉を取り入れたり、ピカソの自画像の変遷から、年齢を重ねるにつれて変わっていく表情に着目するようにしてあるところが特徴的です。このピカソについては、鑑賞のところでも引用されているので関連性があるとみられとてもよいと思います。

○**小島委員** 鑑賞では、3社とも「ピカソのゲルニカ」を取り入れています。日本文教出版は、この作品の時代背景や作者の心情を読み解くことについて関心を持つことに重点を置いています。

開隆堂は、数枚のゲルニカのデッサンを用いて紹介しています。時代背景や心情を読み解くこと、ここでは「怒り」に焦点を絞って表わしているような印象を受けます。これに対し、光村図書は谷川俊太郎の「生きる」の詩を紹介し、ゲルニカを制作しているピカソの写真を用いています。ゲルニカの時代背景については触れられていませんが、単純にゲルニカを見て感じ取れることを大切にしているように思われます。

○**澤委員長** 港区では小中一貫教育を推進しておりますが、この視点でご意見ございますか。

○**綱川委員** 日本文教出版は、目次の次に図画工作から美術へと題して、学習のつながりを生徒作品を多く取り入れ表現しているのが印象的です。

光村図書は、子どもの成長過程が一目でわかるように、「表現」「鑑賞」「作品」とバランスよく紹介されているのが特徴的です。学習のねらいやポイントを多くの写真や作品を使って表わしているので、小中一貫教育の視点ではより適しているのではないのでしょうか。

○**澤委員長** 3社の教科書についていろいろなお意見をいただきました。他にございませんか。

小島委員から、光村図書は、表紙の裏に谷川俊太郎の詩を載せていて、小学校の国語の教科書との関連性からも生徒の豊かな情操を養う上で効果的ではないか。綱川委員から、光村図書は、子どもの成長過程がよくわかるように表現、鑑賞、作品等がバランスよく紹介されている。永山委員から、美術と他教科との関連性も踏まえた教科書がよい。というご意見がありました。その他にコメント等ありますか。

○**永山委員** 3社どれもよいと思いますが、光村図書の表紙のデザインが幻想的で印象に残り、特にということでは光村図書がよいかと思います。

○**澤委員長** 皆様方の意見を総合しますと、「美術」につきましては、光村図書でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 ありがとうございます。「美術」の教科書につきましては、光村図書に決定いたします。

次に、「保健体育」の教科書についてご意見を伺います。

○教育長 4社どれも課題解決型の学習を進めるため、問題解決に主体的に取り組めるよう自分の考えなどを書き込んでいく工夫がしてあります。特に、実生活と深くかかわってくると予想される身近な問題の中で、飲酒あるいは喫煙、薬物乱用など、具体的にその怖さや誘われた場合にどうやって断つたらいいかを、丁寧に扱っている教科書に注目したいと思います。

○永山委員 大日本図書も同じように問題解決型の学習の流れが明示されています。教科書のはじめに「考えよう」というキーワードを設定し、主体的に学べる工夫がみられます。薬物乱用に関しては、シンナーの脳への影響について、正常な脳とシンナー中毒の脳を写真で示すことでその怖さが伝わってくると思います。

○小島委員 大修館は、お酒を先輩に勧められたらどうするか。その答えを書き込みできるように工夫されています。自分の考えを表現できるよう、声に出して言ってみようとか書かれています。また、薬物の乱用についても、違法ドラッグの自動販売機や実物の写真を用いて、より身近な問題として子どもたちが手を出さないように注意していることが非常にわかりやすいと思います。

東京書籍も同じように喫煙、飲酒、薬物乱用の害について、写真や図表を用いて丁寧に説明している印象があります。ただ、説明文や解説が多すぎて、子どもたちに何を一番伝えたいのか、限られた時間の中でどうやって教えるのか、どこにウエイトを置けばいいのか迷ってしまう感じを受けます。中学生のこの時期に、喫煙、飲酒、薬物乱用のことを規制も含めてきちんと教えることは大事なことなので、このポイントで一番わかりやすいところで選びたいと思います。

○綱川委員 私は、学研の取り上げ方がよりインパクトがあると思います。タイトルに「たばこ・酒・薬物に手を出さないために」と学習のねらいを教科書に大きく書き出しているところが、他社が単純に危険性を訴えている表題にしている点と大きく違っています。学研は、手を出さないためのいろいろな方法をエクササイズとしてまとめ、ロールプレイやブレインストーミングを取り入れているところが特徴的です。これは、子どもたちの意思決定力や判断力を育てるのに大変有効と考えます。

○澤委員長 保健編では、飲酒、喫煙、薬物乱用の取り上げ方についてご意見がありました。その中で、綱川委員から学研が他社と違う特徴を出しているというご意見がありました。それでは、体育編についてもご意見を伺います。

○小島委員 大修館では、裏表紙に「オリンピック・パラリンピック日本にやってくる」と題し、オリンピック・パラリンピックに関連した写真を多く取り入れています。東京書籍は、スポーツの素晴らしさについて、第一線で活躍しているスポーツ選手やオリンピックについて紹介しています。大日本も同じように、スポーツは世界の言葉と表現し、様々な競技種目を紹介しています。これらのことから、運動離れ、運動の二極化が危惧されている中、このような教科書で学ぶと運動に対する興味関心が一層高まると思います。

○永山委員 4社とも体育編の章末に、学習のまとめとして学んだことを振り返るページが設定されています。大修館、学研、東京書籍が書き込み式になっているので、ワークシートとしても活用できそうです。さらに、学研の場合は、章のまとめとして「用語の確認」「基礎の完成」「活用の問題」の次に、必ず「生活への活用」があります。自分の思いや考えを生活と関連付けて記述するよう工夫されています。

○永山委員 東京書籍でも、運動会を事例にしてどのような関わり方があるのか話し合っただけで示してあります。また、2013年に開催された北海道マラソンにおいて、大会運営の関係者に加え、会場整備、案内や障害者の支援などのボランティアに着目し、それを大きな写真で役割ごとにまとめられています。ただ、こちらも自分がどのような形で関わっていくのか書き出すスペースがないのが気になります。

○教育長 学研では、スポーツへの多様な関わり方として「行うこと」「見ること」「支えること」について、一つ一つ丁寧にそれに沿ったイラストやカラー写真を用いて生徒の理解が深まるような工夫が感じられます。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに、どのように関わるのか示してあるところが特徴的です。港区の中学校でも、既にオリンピック・パラリンピックに関わる取組を推進している学校もありますし、そのほかの学校でもこれを進めていくという方向でおりますので、この教科書を使ってさらに充実するとよいと思います。

○綱川委員 総合的にみますと、どの社も様々な工夫がみられます。学研は、教科書のはじめに保健体育の学び方・考え方を紹介する以外に、中学校生活と食事について見開き2ページにわたって説明しています。時系列に食事の採り方やその献立の具体例を写真を使って表わしたり、体のコンディションに合わせた食事の採り方に加えて、必要な栄養素まで丁寧に説明しています。この内容は、家庭科とも連携して展開できる内容です。心身の健康の保持増進を図ることが保健体育科の目標にありますので、それに適応した内容ではないかと思います。

○澤委員長 保健編では、飲酒、喫煙、薬物乱用を主として、それに関する各社の取り上げ方についてのご意見がありました。綱川委員からは、中でも学研は一つ進んでいるのではないかというご意見です。体育編では、各社がいろいろな取組をされていますが、永山委員、教育長、綱川委員から、学研がよいというコメントをいただいております。

保健編と体育編を総合すると、「保健体育」につきましては、学研でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 ありがとうございます。「保健体育」の教科書につきましては、学研に決定いたします。

次に、「技術・家庭科（技術分野）」の教科書についてご意見を伺います。

○教育長 学習指導要領の技術・家庭科の目標に「進んで生活を工夫し、創造する能力と実践的な態度を育てる」とあります。したがって、教科書を選択するにあたっては、家庭生活でも活用できる教科書が特によいと思います。

その点では各社とも、家庭に持ち帰っても実生活にすぐに役立つような形で教科書がつくられて

いますが、その中でもより活用しやすい教科書を採択していきたいと思っています。

○**綱川委員** 今の教育長の意見を踏まえると、教育図書の教科書は、ものづくりなどの実践的・体験的な事項を取り上げているページが他社よりも多いです。また、ボックス棚など基本的な木製品の製作を例に各作業工程がわかりやすく提示されており、家庭での日曜大工にも活用できてよいと思います。

○**小島委員** 綱川委員の意見のように教育図書の教科書のよさもありますが、教育図書の教科書の特徴として、木製品の實習例の後に木材の性質を学ぶ流れになっています。残りの2社の教科書は、いずれも木材の性質を学んだ後に實習を行うようになっています。

生徒の視点で考えると、木材に限らず金属やプラスチックなどの材料の性質の知識を踏まえた上で、設計や製作をしたほうがよいのではないかと思います。また、教員もそのほうが教えやすいのではないのでしょうか。

○**永山委員** 技術科の授業では、安全に対する意識を持って授業に取り組んでほしいと思います。

その点では、東京書籍の教科書は、巻頭で4ページにわたって實習前、實習中、實習後、領域別に特に安全に注意する点が掲載されています。各領域の作業ページの「安全」のコーナーとリンクされているなど安全面に配慮されています。

一方、開隆堂の教科書のガイダンスにも、2ページにわたって「作業の安全」が掲載されているに加え、作業ページにも「安全」コーナーが設けられています。

全体的には、東京書籍の教科書のほうがより安全への配慮が窺える気がします。

○**綱川委員** 先ほど、小島委員が言われたように、確かに材質を見極めてからものづくりというのも一考かと思います。

技術科の内容には、ものづくりだけでなく情報教育もあります。特に、21世紀の高度に発達した情報社会を生きる子どもたちにとって、情報モラルに関する教育が極めて大切であると思います。その点では、東京書籍や開隆堂は両社とも、情報セキュリティと情報モラルが丁寧に扱われているほか、「情報モラル」のマークも設けられており、コンピュータの實習をしながら振り返りや確認をすることもできるのでよりよいと思います。

○**澤委員長** 非常に重要な情報教育という視点からご意見をいただきました。

もう一つ大事な視点として、技術科の学習では、技術の発展と社会との係りを通して、技術立国である日本の素晴らしさや地球環境へ配慮したものづくりなどを知ってもらうことが重要です。この点ではいかがでしょうか。

○**教育長** その点について、東京書籍は、各編の冒頭に技術の進展と学習内容を併記していて、生徒にとってもわかりやすいものになっていると思います。さらに、各編の冒頭には小学校の学習との関連を示してあるほか、学習内容の途中にも各教科との関連マークが細かく表示されています。学びながら小学校での既習の教科や他教科との関連を知ることで、生徒にとって興味・関心がより高まるのではないかと思います。

○**澤委員長** 東京書籍の技術分野の最初のところに、大空を目指してということでライト兄弟、飛

行機からはやぶさまでといったものが載せてあります。他にございますか。

○**永山委員** 冒頭で話題になりましたが、実践的な態度を育てるという点では、東京書籍の教科書の巻末に切り離せる防災手帳がついているのが特徴の一つと言えます。この防災手帳は、技術科の学習を踏まえたものになっていますので、生活との関連を確認できるほか防災意識を高める点からも大変よいものと思います。

○**澤委員長** 永山委員から、災害に対する対応が非常に重要な課題となっている視点から、防災手帳は非常に興味深いということ、ものづくりにあたっては生徒たちに安全に対する意識を持ってもらわなくてはならないということ、道具もある意味では危険な道具になるという視点から東京書籍がよいというご意見がありました。

教育長からは、技術の発展という視点から、東京書籍は各編の冒頭にどのように技術が進歩してきたかがきちんと載せてあるということ。綱川委員からは、情報教育に関して東京書籍、開隆堂がかなりよく取り上げているということ。小島委員からは、材料の性質からものづくりに入ったほうがよいということから東京書籍と開隆堂がよいということ。

これまでのご意見から全体的にみますと、「技術・家庭科（技術分野）」につきましては、東京書籍でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○**澤委員長** ありがとうございます。「技術・家庭科（技術分野）」の教科書につきましては、東京書籍に決定いたします。

それでは、引き続き「技術・家庭科（家庭分野）」の教科書についてご意見を伺います。

○**教育長** 先ほどの技術分野でも取り上げましたが、家庭分野においても家庭生活でも活用できる教科書がよいと思います。実物大の写真の掲載、文字や写真の配列、説明の仕方など編集に工夫をすることで、生徒が学びやすく教師が教えやすい教科書、効率的に基礎的・基本的な知識・技術が身に付く教科書であってほしいと思います。特に港区では、家庭科教諭でなく講師が指導している学校もあることから、学習内容をわかりやすく説明してあり、先生方も教えやすく、生徒にとっても基礎的・基本的な知識・技能を身に付けることができるよう工夫された教科書がよいのではないかと思います。

○**小島委員** 3社とも教科書の表現・表記では工夫されていますが、基礎的・基本的な知識・技能の一例を挙げると、調理実習では各社違いが見られます。教育図書と開隆堂は、調理実習例に主食・主菜等のほか、デザート・間食も含めた実習例が掲載されています。ただし、教育図書は、他の2社と比べると写真が小さく、調理手順の説明文も少ないように感じます。生活で実践することを考えると、東京書籍や開隆堂の調理実習例のように、見開き2ページを使用した調理手順や調理時間の配分がきちんと書かれている教科書がよいと思います。東京書籍は、調理工程が横並びに6枚の大きな写真で載っているのも、イメージを持ちながら調理できると思います。

○**永山委員** 小島委員の意見に付け加えて、開隆堂と東京書籍は、実習例や写真の掲載などにも工夫が見られます。開隆堂は、家庭における調理だけでなく、お弁当に合うおかずの作り方が掲載さ

れており、栄養や味のバランスを考えながら調理できると思います。東京書籍は、実習例と同じページ内に副菜や汁物の材料やつくり方の例が丁寧に書かれています。また、衛生面では「衛生」のマークで強調して書かれていますので、日常生活で活用しやすいと思います。

○**綱川委員** 家庭分野と技術分野は、卒業後にも1家に1冊のバイブル的な本として役に立てるのではないかと思います。

実習例で考えると、家庭分野では布を用いた制作実習もあります。各社とも安全面に留意するところもしっかり押さえて書かれています。ミシンの準備や使い方も各社記載してありますが、教育図書は見開き2ページにわたって、ミシンの準備から、調子よく縫えないときの主な原因まで説明しています。コンパクトにまとめられていて見やすい構成となっています。

開隆堂は、ミシンの準備だけで見開き2ページを使っています。縫い始めから縫い終わりまでイラストと説明文で示してあるのでとてもわかりやすいです。

東京書籍は、4ページにもわたってミシンの使い方を説明しています。特に下糸を巻くことから引き出すまでを丁寧に説明してあるところが特徴的です。これだと、縫い始めから終わりまでつまづくことなく進められると思います。

○**小島委員** 私は、家庭分野の学習の進め方に注目しました。開隆堂では、人やものに関わりながら学ぶことを中心にして学習をすすめるように示してあります。家庭分野を学びながら、自分で考え行動し、自分とは異なる他者の意見を尊重し、自分にとって「当たり前の生活」を問い直していくことをねらいとしています。私は、とても大事なねらいだと思います。

○**永山委員** 東京書籍では、家庭分野の学習の進め方を「問題を解決する筋道」としています。「課題発見」から「計画」「実践」「評価」「改善」「次の課題への取組」、そして「課題発見」へとつながっています。この考え方や進め方は、アクティブ・ラーニングと同じではないでしょうか。家庭分野の学習を通して、子どもが能動的に学ぶ態度や実践力が身に付くことが港区の子どもたちに必要なことだと思います。

○**小島委員** 東京書籍のこの肉じゃがは、先ほど言ったように6つの写真で説明しているのですが、つくり方が非常にわかりやすく、東京書籍が一番よいと思います。

○**澤委員長** 東京書籍だけではなくどの社も写真がきれいですね。

これまでの意見を集約しますと、「技術・家庭科（家庭分野）」につきましては、東京書籍でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○**澤委員長** ありがとうございます。「技術・家庭科（家庭分野）」の教科書につきましては、東京書籍に決定いたします。

最後になりますが、「英語」の教科書についてご意見を伺います。

○**永山委員** 港区の子どもたちは、小学校1年生から国際科で英語に慣れ親しんでいる実態があります。また、在住外国人や大使館が多い地域特性などを踏まえ、港区の中学校で英語をどのように学んでいくかが大事な視点だと思います。

○**教育長** 東京書籍（ニューホライズン）は、「ユニット」で学んだ後の「デイリーシーン」という項目で、日常生活でよく使われる表現が紹介されていて非常に実践的だと思います。自己表現に役立つ単語・表現がまとめられていてよいと思います。

教育出版（ワンワールド）も、各レッスンがホップ、ステップ、ジャンプという段階で構成され、表現活動を重視している特徴があります。本文では会話文や対話文が多く、若干読みもの教材が少ない印象を持ちました。

○**綱川委員** 学校図書（トータル）は、小学校で会話表現として慣れ親しんでいる I like soccer などの一般動詞から導入されているので、生徒の英語学習の動機付けとしては、興味・関心を高めると思います。

三省堂（クラウン）は、対話、スピーチ、インタビュー、説明文など題材や生徒の発達段階に合わせた多様な形式になっています。「USE Read」は分量が多く内容が高度で、発展的な学習に効果的であると考えます。

現在使用している開隆堂（サンシャイン）は、小学校との接続を丁寧に取り上げているという印象を持ちました。

○**小島委員** 光村図書の教科書について述べたいと思います。目次に着目すると、ユニットの単元名だけが記載され、コミュニケーション重視の編集になっていると感じます。他の教科書が目次などでしっかりとその単元で学ぶ文法事項を押さえようとする方針と違うことがよくわかります。その点、光村図書は1年生から3年生まで同じキャラクター設定で、出会いや友情、仲たがひ、修学旅行など生徒が親しみを持ちやすいストーリー展開になっています。

○**澤委員長** 3人の委員から各社の教科書についてご意見をいただきました。いずれにしても、先生方にはそれぞれの教科書の特徴に合わせた指導をしていただく必要があります。永山委員が言われたように、小学校1年生から6年間、週2時間「国際科」で英語を学習している港区の子どもたちにふさわしい教科書を採択したいと考えます。他にご意見ございますか。

○**教育長** 先ほど、綱川委員が小学校からの接続について開隆堂の教科書のところでふれられていましたが、どの教科書も小学校高学年での外国語活動の授業が必修になっていることを考慮して、1年生の教科書の冒頭では小学校の外国語活動との接続を工夫している編集になっていると感じました。

私は、現在使用している開隆堂を含めて、多くの教科書がユニットあるいはレッスン各課に配置されている練習問題も、やや機械的な文法重視の練習が多く、自分から身振り手振りあるいは表情を使った非言語コミュニケーションを促すには工夫が必要であると思いました。

○**綱川委員** 非言語コミュニケーションを否定するわけではありませんが、今までの文法重視の授業の方法でパターンを繰り返し教えていくのに慣れている教員がいるとすれば、非言語コミュニケーション中心の教科書になると、教える側の先生にとっては、教材研究への負担感が出てくるのではないのでしょうか。

○**小島委員** 英語は聞き、話す、読む、書くという4つの技能があるわけですが、どこに重点を置

くかということで、従前の英語教育は、読んで中身を理解し、そして書くことに力を入れてきました。しかし、英語教育の成果を分析するに、果たしてそれでいいのだろうかという大きな疑問が出て、これからのグローバル時代に適合した英語教育はどうあるべきかということから、読解や文法、英作文重視からコミュニケーション能力として、聞いて、話して、自分の考えを伝える、相手のいうことを理解するというコミュニケーションをとることが、これからの生徒たちにとっては重要だと考えるようになってきました。

私も当初、そのような考えに基づく教科書が従前と比べて活字が少なく絵が多いので、こんなことで英字新聞が読めるのかという疑問から大変違和感を憶えました。しかし、国際交流がどんどん発展し、ますますグローバル化が進む今日においては、もっともっとお互いに自分のことを相手に伝える、相手のことを理解するというコミュニケーション能力を高めていかななくてはならなくなりました。そうなった場合の教科書はどうあるべきかを真剣に考えざるを得ない時代にきています。

先だって、松阪市のICT活用教育を視察してきました。5年前、ベテランの先生方はICT機器をなかなかスムーズに扱えなくて、国語科の伝統的な勉強は、漢字を覚えてそれで本を読み、作文を書ければ立派な大人に成長できるのだと、何もICT機器をそれほど推進しなくてもいいと言っていたそうです。しかし、5年後の今日においては、ICT機器にも慣れ、その重要さを全員理解できるようになったそうです。英語教育もそうなのですね。文法や読解を重視する旧態依前の考え方から早く頭を切り替えて、コミュニケーション能力を養うことを重視しなければなりません。港区の子どもたちは、小学校1年生から週に2時間、聞く、話すという授業を続けてきているので、それを発展させる教科書がよいと思います。

港区では、習熟度別授業で、生徒の能力に合わせてオールイングリッシュで授業が行われている学校がほとんどです。英語の授業のレベルも全体に上がっているので問題はないだろうと思っています。小学校から国際科で学んでいる生徒の実態を考えると、光村図書は、他の教科書と違い、これまで課題と言われてきた文法重視、教科としての英語学習の脱却という色合いが強い教科書だと思います。スキット練習も、単に原稿を読みながらの対話練習や単語を入れ替えるだけのパターン練習にならないように、教師が工夫できる余地がふんだんにあるところが港区のこれからの英語教育の進む方向、実態に非常に合っていると思います。

○澤委員長 大学入試制度改革が進む中で、英語は知識偏重型ではなく活用型の入試制度に移りつつあります。これからの英語教育で求められるのは、文法重視や読解偏重から、表現力・コミュニケーション力を育成することに移行しなければならないということですね。

そういった観点から、ご意見ございますか。

○永山委員 2020年のオリンピック・パラリンピックの際に、英語を使っておもてなしができる港区民を育成することを目指していることを考えると、中学生にとって、コミュニケーションに力点を置いて英語の授業が進められることは大変よいことだと思います。

○綱川委員 澤委員長からも大学入試制度改革が進んでいるというお話がありました。将来の進路を考える時期を迎える子どもたちにとって、コミュニケーションに力を入れると文法事項などがお

るそかになることが心配されます。コミュニケーション重視だけでよいのか、子どもたちが混乱することなく英語学習ができればとよいと思います。

○小島委員 光村図書の教科書の本文を見てみると、コミュニケーションを非常に重視しています。ターゲットとする文法事項についてはしっかりと同じページで例文として取り上げています。

また、まとめと練習のコーナーで文法事項を押さえる練習になっていますので、文法事項の学習がおろそかにならないような配慮をしているので、特に問題はないと思います。

○永山委員 光村図書は、英文が自然で生きた英語の使い方が学べる編集になっていると思います。No way、Let's see、Mm…など、会話のつながりに必要な表現を紹介しているのは、実際の会話をイメージしやすいと思います。

また、選定資料にもあるように、学習した英語をどのように活用していくかという視点で学習が進められることができるので、コミュニケーション能力の向上に大いに役立つと思います。これらのことを総合的に見て、光村図書は港区の実態に合っていると思います。

○教育長 文法重視の練習問題が多いということからすると、相手と会話をするコミュニケーションに力を入れている教科書があってもいいのではないかということです。文法事項もしっかりと押さえた上で、光村図書はコミュニケーションについても非常に重点を置いて書かれているので、私は光村図書がよいと思います。

○澤委員長 「英語」につきましては、光村図書でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 ありがとうございます。「英語」の教科書につきましては、光村図書に決定いたします。

長時間ありがとうございます。以上をもちまして、平成28年度から区立中学校で使用する教科書の全てを決定いたしました。それでは、再度確認させていただきます。

国語につきましては「光村図書出版」、書写につきましては「学校図書」、社会・地理につきましては「東京書籍」、社会・地図につきましては「東京書籍」、社会・歴史につきましては「教育出版」、社会・公民につきましては「東京書籍」、数学につきましては「東京書籍」、理科につきましては「新興出版社啓林館」、音楽・一般につきましては「教育芸術社」、音楽・器楽合唱につきましては「教育芸術社」、美術につきましては「光村図書出版」、保健体育につきましては「学研教育未来」、技術家庭・技術分野につきましては「東京書籍」、技術家庭・家庭分野につきましては「東京書籍」、英語につきましては「光村図書出版」に決定いたしました。以上です。

○指導室長 教育委員の皆様、お疲れさまでございました。

区立小学校の使用教科用図書につきましては、義務教育小学校の教科用図書の無償措置に関する法律法令の規定によりまして、4年間は同一の教科書を採択することとなっております。平成26年度における採択で決定したとおり、平成30年度までは同じ教科書を使用することになりますので、この場でご確認をお願いいたします。

2 議案第62号 平成28年度区立小学校特別支援学級使用教科用図書の採択について

3 議案第63号 平成28年度区立中学校特別支援学級使用教科用図書の採択について

○澤委員長 続きまして、議案第62号「平成28年度区立小学校特別支援学級使用教科用図書の採択について」、議案第63号「平成28年度区立中学校特別支援学級使用教科用図書の採択について」、この2件については、一括して説明を受け、質疑応答後、1件ずつ採決を行いたいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。

(異議なし)

○澤委員長 それでは、指導室長、説明をお願いします。

○指導室長 平成28年度区立小学校特別支援学級使用教科用図書と平成28年度区立中学校特別支援学級使用教科用図書の採択につきまして併せてご説明させていただきます。

議案資料ナンバー2、議案資料ナンバー3をご覧ください。

区立小中学校特別支援学級で使用する教科用図書につきましては、文部科学省の検定を経た教科書、そして文部科学省が著作した教科書、それ以外の教科用図書については、義務教育小学校の教科用図書無償措置に関する法律の規定等により、教育委員会が毎年採択することとなっております。また、特別支援学級の教科書の選定にあたりましては、学校教育法付則第9条及び同法施行規則第139条の規定により限定教科書等を使用することが適切でない場合には、それぞれ当該特別支援学級を置く学校の設置者の定めるところにより、他の適切な教科用図書を使用することができることとなっております。

これにより、当該学年の検定教科書を使用することが適切でない場合には、教科用図書の採択を次の3点から行うことができます。

まずは、学年を下げた検定教科書の採択です。例えば中学校におきましては、小学校の検定教科書も使用ができるということです。

次に、特別支援学校用の文部科学省の著作教科書の採択です。いわゆる星がついているので星本と言われるものです。幾つかご用意させていただいています。

次に、一般に市販されている一般図書からの採択です。学校教育法付則第9条図書、いわゆる付則第9条本と言われ、東京都教育委員会によって例示されている教科用図書としてふさわしい本を中心に、特別支援学級ごとに児童生徒の状況や指導の内容から総合的に判断して最もふさわしいと思われる教科用図書の案を提示させていただきました。

お手元の資料では、一般図書につきましては、発行者を50音順に一覧にしています。

説明は以上です。よろしくご審議のほどお願いいたします。

○澤委員長 ただいまの説明に対してご質問ございますか。

○小島委員 特別支援学級で使用する教科書は、特別支援学級のそれぞれの現場の先生や校長先生がその子どもの発達状況にあわせて推薦してきておりますので、この内容で承認することによろしいのではないのでしょうか。

○澤委員長 ほかに、ご質問ございませんか。

(なし)

○澤委員長 それでは、一つずつ採決に入らせていただきます。

議案第62号について、原案どおり可決することにご異議ございませんか。

(異議なし)

○澤委員長 それでは、議案第62号について、原案どおり可決することに決定いたしました。

次に、議案第63号について、原案どおり可決することにご異議ございませんか。

(異議なし)

○澤委員長 それでは、議案第63号について、原案どおり可決することに決定いたしました。

以上をもちまして、教科書の採択に関する審議を終了いたします。

それでは、議事の運営上、ここで委員会を休憩させていただきます。再開は午後3時20分といたします。よろしくお願いいたします。

(休憩)

第2 審議事項

4 議案第64号 港区立幼稚園教育職員の人事について（非公開）

○澤委員長 次に、議案第64号「港区立幼稚園教育職員の人事について」です。この議案につきましては、人事に関する案件のため、非公開としたいと思います。ご異議ございませんか。

(異議なし)

○澤委員長 ご異議ないようですので、港区教育委員会会議規則第13条第2項に基づき、非公開といたします。

(非公開)

第3 教育長報告事項

1 平成28年度予算編成方針及び予算の見積りに係る依命通達について

○澤委員長 次に、日程第3、教育長報告事項に入ります。

「平成28年度予算編成方針及び予算の見積りに係る依命通達について」庶務課長、説明をお願いします。

○庶務課長 「平成28年度予算編成方針及び予算の見積りに係る依命通達について」ご報告いたします。資料ナンバー1をご覧ください。

平成28年度の予算編成につきましては、平成27年7月23日付で予算編成方針が区長決定され、平成28年度予算の見積りについて依命通達がありました。2枚おめくりいただきますと平成28年度予算編成方針があります。区を取り巻く環境としまして、国や東京都の動きが記載されています。

さらに、区の状況としては、区役所・支所改革からちょうど10年を迎えるということ、また、

平成29年3月には、昭和22年に港区が誕生してから丸70年を迎える一つの節目の年であるという状況があります。

財政の見通しです。引き続き港区の各世代の人口は増加傾向にあり、特別区民税の増収が見込まれます。よって、歳入につきましては、今後も安定的に推移する見通しです。

歳出につきましては、今後の人口増加を見据えて、子育て支援や教育などの行政サービスの充実に取り組む必要があることから、住む人・訪れる人が安全に安心して快適に過ごすことができるまちづくりを推進する必要があるとしています。

これらを踏まえ、平成28年度予算は、『安全で安心して暮らせる、夢と希望に満ちた港区の未来を創り上げるための予算』としています。

教育委員会としましても、この予算編成方針に基づき、港区教育ビジョンに掲げております基本理念「全ての人の学びを支え、つなぎ、生かす」とこの教育の実現に向けて、港区基本計画や教育ビジョンのもとで策定、改訂しました各個別計画の着実な推進のために、より効果的に予算要求をしてみたいと考えています。

今後の予定ですが、平成28年度の予算編成作業は、例年より早目の予算プレス発表を行うということから、全体として前倒しで進められています。

9月初めには、経常的な経費である一次経費の提出の締め切り、10月初めには、新規やレベルアップ等の事業となる二次経費の提出締め切りとなっています。主要な事業に関しましては、11月には区長プレゼンテーションを行い、区長査定を経て、1月中には予算案決定とプレス発表までを予定しているとのことです。

本日は、これから始める予算編成作業の概要についてご報告いたします。

今後、教育委員の皆さんへは、編成作業の節目に応じて、適宜情報提供してまいりますので、よろしく願いいたします。

説明は以上です。

○澤委員長 ただいまの説明に対して、ご質問ございますか。

○小島委員 教育委員会の予算について、細かいことは別として、来年度教育委員会の目標としては、どういう事業を実施して、およそどれくらいの支出を考えているのか、収入の面もありますが、その辺を随時、大まかで結構ですのでお示しいただけるとありがたいと思います。ぜひよろしくお願い致します。

○庶務課長 小島委員ご指摘のとおり、特に二次経費は、教育委員会としても来年度の目玉として、ぜひとも予算をいただきたいということで要求していくことになります。

まだまだ、検討中ですが、要求前にはしっかりと状況をお出しして、教育委員の皆さんのご意見もいただきながら反映させていきたいと思っておりますので、改めましてよろしくお願い致します。

○小島委員 こちらこそ、よろしくお願い致します。

○綱川委員 総合教育会議が過去2回開催されました。予算編成についての説明がありましたが、

総合教育会議の中で、議題や決定事項ではないですが、協議する場となる可能性は考えられますか。

○庶務課長 3回目以降については、まだ具体的な内容を詰めているところまでいっておりませんが、一つの考えとして、予算は大きな教育行政の推進のためには大事なところですので、テーマの候補にはなり得るのかなという考えは持っております。

第2回の総合教育会議で話題となりましたICTをとりましても、委員長が言われたお話も、やはり裏付けがなければきちん進められないという部分があります。施策の柱をどこにするかテーマが設定できればよいという考えは持っておりますので、ご意見を参考にさせていただきたいと思えます。

○澤委員長 庶務課長から説明していただいた依命通達とは、どういうことですか。

○小島委員 区長より命令を受けたので、副区長が区長になりかわってお知らせいたしますということではないですか。

○澤委員長 綱川委員が言われたことですが、安全で安心して暮らせる、夢と希望に満ちた港区の未来を創り上げるための予算を要求するために、教育委員会側としては、将来的に何が必要なのか、そういった視点で、総合教育会議で話題にすることはあると思えます。

○庶務課長 依命通達は区長の命によってなされる通達ということですので、両副区長名での通達です。来年度予算編成とはいっても、3年ごとの個別計画が2年目にあたるということもありますので、その先も見据えたステップと捉えて、中期的な視点も十分に打ち出しながら進めていきたいと思えます。

○澤委員長 それでは、この案件はよろしいでしょうか。

(なし)

○澤委員長 本日予定しております案件は全て終了しましたが、庶務課長、その他何かありますか。

○庶務課長 特にございませぬ。

「閉 会」

○澤委員長 わかりました。なければ、これもちまして閉会いたします。

次回は、臨時会を8月21日金曜日、午前10時から開催予定です。よろしくお願ひいたします。

皆さん、お疲れさまでした。 (午後3時42分)

会議録署名人

港区教育委員会委員長 澤 孝一郎

港区教育委員会委員 綱 川 智 久